高志の国
文学館
KOSHINOKUNI
Museum of Literature

高志の国文学館 紀要

第8号

令和4年度 高志の国文学館 紀要 第8号

目次

Ⅰ

〔企画展概要〕

（1）企画展「個性きらめく富山の女性作家たち 展」（第2期　多彩な活動の展開）　綿引　香織　4

（2）開館10周年記念企画展「荒井良二のＰＩＣＴＵＲＥ　ＢＯＯＫ〈絵・本〉」　大川原竜一　11

（3）開館10周年記念企画展「没後50年　芥川賞作家　柏原兵三展」　小林加代子　17

（4）開館10周年記念企画展「没後50年　川端康成 展―愛を乞う魂」　亀島麻衣子　23

（5）開館10周年記念企画展・Ｇ７教育大臣会合開催記念「百人一首―和歌と美の世界 展」　綿引　香織　30

Ⅱ

〔論文〕

愛惜（あいじゃく）と絶望　―八世紀日本における詩の成熟―　中西　進　35

Ⅰ〔企画展概要〕

（1）企画展「個性きらめく富山の女性作家たち 展」
（第２期　多彩な活動の展開）　綿引　香織

（2）開館10周年記念企画展
「荒井良二のＰＩＣＴＵＲＥ　ＢＯＯＫ〈絵・本〉」　大川原竜一

（3）開館10周年記念企画展「没後50年　芥川賞作家　柏原兵三展」　小林加代子

（4）開館10周年記念企画展「没後50年　川端康成 展―愛を乞う魂」　亀島麻衣子

（5）開館10周年記念企画展・Ｇ７教育大臣会合開催記念
「百人一首―和歌と美の世界 展」　綿引　香織

（1）企画展
「個性きらめく富山の女性作家たち 展」
（第2期　多彩な活動の展開）

綿引　香織

本展第1期（1月16日～3月21日）の概要を紹介した前稿に続き、本稿では、第2期「多彩な活動の展開」（3月30日～6月6日）について述べていきたい。この展示でとりあげたのは、昭和・平成を中心に幅広いジャンルの作品を発表し、富山の文学界を牽引した4人の作家たち―野村玉枝、遠藤和子、辺見じゅん、木崎さと子である。

戦中・戦後を歌とともに歩んだ歌人・**野村玉枝**（1911～2008）は、明治44年、農業を営む吉井藤三郎、めつの四女として西礪波郡東太美村（現南砺市福光町）に生まれ、母や姉の影響で幼少時から短歌に親しんだ。県立富山高等女学校高等科を卒業後、小学校教員として勤めるかたわら竹柏会に入会し、『心の花』に作品発表を始める。本格的に作歌を学ぶため上京し、佐佐木信綱に師事。郷里で結婚後、出征した夫は3年後に戦死。昭和15年（1940）から2年間、東京特設中等教員養成所に学んで中等教員資格を取得し、戦後も長らく高校教諭などを務めた。昭和16年に刊行した歌集『雪華』は反響を呼び、佐佐木信綱、吉川英治の序を得て翌年に出版した歌文集『御羽車』はベストセラーとなる。次いで歌集『一筋の道』（昭和20）を刊行。

戦後は昭和21年（1946）創刊の『短歌時代』に参加。昭和28年頃から『婦人北日本新聞』の歌壇選者となり、昭和37年（1962）には、そこから発展した「アカンサス短歌会」を主宰し、女性歌人たちを指導した。また、富山県歌人連盟の結成時から関わり、理事などを務めた。このほかの著書に、随筆集『石南花の記』（昭和38）がある。平成20年（2008）、97歳で死去。

「文学活動のはじまり、歌人としての出発」のコーナーでは、小学校時代の文集や写真、学生時代の歌稿ノート等を展示。生涯を通じて活動の場とした『心の花』や、歌が掲載された『新万葉集』（昭和13年）等を展示。**「出征兵士の妻として、母として」**のコーナーでは、東京特設中等教員養成所時代の写真や、話題を呼んだ第一歌集『雪華』とその楽譜、歌文集『御羽車』、第二歌集『一筋の道』とその関連資料（雑誌、写真、歌稿ノートなど）を展示した。**「県内歌壇での活躍と女性歌人の育成」**のコーナーでは、戦後すぐに加わった『短歌時代』や『富山県歌人』、歌壇選者を務めた『婦人北日本新聞』とそれをまとめた『婦人北日本の歌』、自ら主宰した「アカンサス短歌会」の合同歌集等を紹介し、米田憲三氏による「野村玉枝十首選および鑑賞」のパネルを掲示した。また、美術を趣味とした玉枝の油彩画や石膏像も展示した。これらのほとんどが初公開の資料である。

ふるさと富山の物語を次世代につなぐ作家・**遠藤和子**（1925～）は、大正14年、種物取引を営む父幸次郎、キヨヱの二女として富山市上り立町（現在の向川原町）に生まれた。県立富山高等女学校を経て、昭和19年（1944）に富山師範学校（現富山大学）女子師範二部を卒業。戦後は富山市内の小学校に勤務。昭和26年（1951）、学校劇講習会で児童劇作家の斎田喬と出会い、児童劇や童話の創作を始める。昭和44年（1969）、特殊学級を担任した経験をもとにした小説『あしたの歌』を刊行し、以降、教育実践記録を次々に発表し注目される。昭和48年（1973）、ダム建設によって離村が進む僻地の分校を舞台にした長編童話『オロロのいる村』を刊行。

伝記『松村謙三』（昭和50）をきっかけに、富山の土地や人物に目を向けるようになり、膨大な資料と丹念な取材に裏打ちされた小説『物語・佐々成政』（昭和57）と評伝『〈悲運の知将〉の実像　佐々成政』（昭和61）を発表。その後富山では、『物語・佐々成政』を原作とした富山市制百周年記念市民劇「佐々成政」が上演されるなど、成政ブームが起こった。平成25年（2013）には、佐々成政の孫世代に光をあてた『家光大奥・中の丸の生涯』を刊行。このほか、富山の自然や地域産業をテーマにした作品として、絵本『ライチョウは生きる』（平成元）や『富山の薬売り　マーケティングの先駆者たち』（平成5）などがある。

「教育現場から生まれた作品」のコーナーでは、教員時代に手がけた児童劇作台本集や教育実践記録、長編童話のほか、当時の写真やインタビュー記

事等を展示した。**「郷土の歴史・文化・産業に目を向ける」**のコーナーでは、本格的な作家活動のきっかけとなった『松村謙三』や『富山の薬売り』のほか、『立山と黒部の昔話』等、郷土富山に取材した著作を紹介。**「佐々成政をめぐる物語」**のコーナーでは、成政の実像を追求した『物語・佐々成政』と『〈悲運の知将〉の実像　佐々成政』、その後富山で起こった成政ブームを示す資料（創作劇「佐々成政」の台本等）を展示。その後の成政の子孫たちの物語を描いた『家光大奥・中の丸の生涯』について、膨大な取材ノートの一部や原稿等とともに紹介した。あわせて、自らの作家活動の歩みを語る**インタビュー映像**も会場内で上映した。

風土の記憶と日本人の命の声を語り継ぐ作家・歌人の**辺見じゅん**（１９３９～２０１１）は、昭和14年、国文学者で俳人の角川源義、冨美子の長女として、中新川郡水橋町（現富山市）に生まれた。本名、眞弓。水橋の祖父母のもとで小学校入学まで育てられる。東京都立豊多摩高等学校、早稲田大学文学部を卒業。出版社勤務を経て、昭和39年（１９６４）、小説『花冷え』を発表。その後民俗学に傾倒し、昭和50年（１９７５）、『呪われたシルク・ロード』で本格的な作家活動に入る。翌年には第1歌集『雪の座』を刊行し、以降、作家と歌人という二つの顔で活動を始める。

ノンフィクションの分野では、『ふるさと幻視行』（昭和53）、『花子のくにの歳時記』（平成3）などの民俗・民話に関するもの、『男たちの大和』（昭和58年刊。新田次郎文学賞）、『収容所から来た遺書』（平成元年刊。講談社ノンフィクション賞、大宅壮一ノンフィクション賞）などの太平洋戦争に関するもののほか、『夢、未だ盡きず』（平成10年刊。ミズノ・スポーツライター賞）などがある。短歌の分野では、昭和63年（１９８８）に現代短歌女流賞を受賞した歌集『闇の祝祭』を含む6冊の歌集がある。平成19年（２００７）には「弦短歌会」を創設し、富山発の総合文芸誌『弦』を創刊。平成14年（２００２）には出版社・幻戯書房を設立。平成23年（２０１１）、72歳で死去。

「文学活動のはじまり」のコーナーでは、中学・高校時代の作品が掲載されている文芸誌、合同歌集『記憶の種子』、小説『花冷え』等を紹介。**「歌人としての活動」**のコーナーでは、自筆色紙や歌稿、歌集、弦短歌会の季刊誌『弦』、「現代短歌女流賞」の記念品や愛用品等を展示し、平岡和代氏による「辺見じゅん十首選および鑑賞五首」のパネルを掲示した。**「作家活動のはじまり」**のコーナーでは、民話・昔話採録の仕事、民俗調査から始まったノンフィクション作品について、取材テープ、ノート等とともに展示。**「太平洋戦争に取材した作品」**のコーナーでは、著書とともに、『男たちの大和』のテープ起こし原稿、『昭和の遺書』の後書原稿、『収容所から来た遺書』の取材ノートや構想メモ等を展示。公開間近となった映画『ラーゲリより愛を込めて』のパネルや予告編映像も紹介した。

人間の生と死を見つめ、愛の本質を追求する作家・**木崎さと子**（１９３９～）は、昭和14年、応用科学の研究者・横山辰雄と基子の二女として、旧満洲新京市（現中国長春市）に生まれた。本名・正子。4歳で生母と死別。満洲で敗戦を迎え、混乱する状況のなか、昭和21年（１９４６）8月に帰国。父の故郷沼津や東京を経て、父の富山大学工学部教授就任にともない、小学5年生の時に高岡市立定塚小学校に転入し、県立高岡高等学校卒業まで高岡で暮らす。昭和35年（１９６０）に東京女子大学短期大学部英語科を卒業し、その2年後、結婚を機にフランスに渡り、昭和54年（１９７９）まで夫の勤務地のフランス、アメリカに滞在。

帰国後執筆活動に入り、昭和55年（１９８０）、小説『裸足』で第51回文學界新人賞を受賞。昭和60年（１９８５）、乳がんの治療を拒否し故郷に戻った叔母とそれを看取る姪との心の交錯を描いた『青桐』で第92回芥川賞を受賞した。『青桐』、『沈める寺』（昭和62年刊、芸術選奨文部大臣新人賞受賞）、『鏡の谷』（平成2）、『光る沼』（平成12）等の作品に富山の風土が色濃く反映されている。また木崎作品においてキリスト教は重要なモチーフの一つとなっており、この方面の著作も多い。このほかインタビューや対談集、エッセイ、絵本など幅広く手がけている。

「作家としての出発」のコーナーでは、デビュー作『裸足』の初稿、完成稿、校正刷、掲載誌等を並べ、その変遷を展示。**「木崎作品と富山」**のコーナーでは、芥川賞受賞作『青桐』をはじめとする富山を舞台にした作品を紹介。『沈める寺』の人物設定や構想のメモ、作中に登場するオブジェ、「夏草」の草稿などを展示した。**「キリスト教に関連する作品」**のコーナーでは、木崎

が1980年代からエッセイ等を掲載してきたカトリック誌『あけぼの』、『小説　聖書の女性たち』などの著書、愛用の聖書などを展示。このほか、さまざまなテーマで書かれた短編・長編小説、童話や対談等を紹介。**「自らを語る作品」**のコーナーでは、満洲での幼少期の記憶が語られているエッセイや、作品ともゆかりの深い絵画やガラス作品を展示した。

あわせて、回廊コーナー「今をはばたく富山の女性作家たち」の展示についてもふれておく。ここでは、現在活躍中の県ゆかりの散文作家のうち、恩田陸、高山羽根子、山内マリコ、小谷真理、坂東眞理子、室井滋、大垣さなゑ、栗林佐知、霜月りつ、杉本りえ、廣川まさき、村木美涼、やまとけいこの各氏について、作家・作品紹介のほか、「メッセージ」「富山の思い出」などのコラムを加えて紹介した。

現代の作家を取りあげた第2期の展示は、よく知られている作品も多く、その創作の裏側を紹介する貴重な機会となった。また、作家本人と交流があったり、報道などを通じてその活動の一端を見聞きしていたなど、同時代作家ならではの親しみを感じた方も多かったのではないだろうか。

展示室内は基本的に、作家個々の人生の軌跡をたどりつつ、そこから生み出された作品について紹介するという構成をとった。自筆の原稿やノート、色紙、写真、愛用品、取材資料、映像など、それぞれの展示物のなかに作家の個性がにじみ出ており、コーナーごとに鮮やかな対照をなしていたのが印象的だった。今回の展覧会が初公開となった資料も多い。

本展の開催にあたり、作家の皆様・ご遺族をはじめ、多大なご協力をいただいた関係各位に深く感謝申しあげます。

□主な展示物

種別	資料（作品）名	作者	年代	所蔵
遠藤和子				
パネル（写真）	柳町小学校の教師時代（20代）			遠藤和子氏提供
パネル（写真）	信州八ヶ岳高原にある斎田喬先生の小屋へ行ったとき			遠藤和子氏提供
書籍	みんなでできる 新しい小学校劇集1 低学年用（正進社）	日本児童演劇協会編、遠藤和子ほか	昭和46年（1971）	個人
書籍	みんなの学校劇 二年生（ポプラ社）	栗原一登監修、遠藤和子ほか	昭和56年（1981）	個人
色紙	「出会いは人生の創造なり」	遠藤和子	不明	高志の国文学館
書籍	あしたの歌（あすなろ事業出版）	遠藤和子	昭和44年（1969）	高志の国文学館
書籍	おとなってみんな悩んでいるのね―11歳の目―（あすなろ書房）	遠藤和子	昭和44年（1969）	高志の国文学館
パネル	『おとなって みんな悩んでいるのね』書評		昭和45年（1970）2月9日	遠藤和子氏提供
雑誌	週刊朝日 3月27日増大号（朝日新聞社）		昭和45年（1970）	個人

種別	資料（作品）名	作者	年代	所蔵
書籍	星になったおばあちゃん（あすなろ書房）	遠藤和子	昭和46年（1971）	高志の国文学館
書籍	明日があるから生きるんだ（サイマル出版会）	玉井義臣編、遠藤和子ほか	昭和46年（1971）	高志の国文学館
書籍	オロロのいる村（あすなろ書房）	遠藤和子	昭和48年（1975）	高志の国文学館
パネル（写真）	『オロロのいる村』の取材 福光町刀利ダム辺			遠藤和子氏提供
書籍	女王の国から来たマリ（あすなろ書房）	遠藤和子	昭和52年（1977）	高志の国文学館
パネル（写真）	遠藤和子著『女王の国から来たマリ』、岡部清詩集『山奥のムラの証言』合同出版記念会			遠藤和子氏提供
書籍	立山と黒部の昔話 全2巻（立山黒部貫光、立山貫光ターミナル）	遠藤和子監修		個人
書籍	松村謙三（KNB興産出版）	遠藤和子	昭和50年（1975）	高志の国文学館
書籍	松村謙三（中国語版）（三联书出版）	遠藤和子	昭和62年（1987）	高志の国文学館
色紙	「自然ハ寶」	遠藤和子	不明	高志の国文学館
書籍	ライチョウは生きる（小峰書店）	遠藤和子文、井口文秀絵	平成元年（1989）	高志の国文学館

種別	資料（作品）名	作者	年代	所蔵
書籍	上海風雲録 重松為治翁伝（カサマツ）	遠藤和子	平成3年（1991）	富山県立図書館
色紙	「ふるさとに学ぶ」	遠藤和子	不明	高志の国文学館
書籍	ふるさと歴史舞台7 郷土に根づいた産物と商魂（ぎょうせい）	遠藤和子ほか	平成4年（1992）	高志の国文学館
書籍	富山の薬売り ―マーケティングの先駆者たち―（サイマル出版会）	遠藤和子	平成5年（1993）	高志の国文学館
書籍	富山のセールスマンシップ ―薬売り成功の知恵（サイマル出版会）	遠藤和子	平成7年（1995）	高志の国文学館
パネル（写真）	「富山の薬売り」関連講演会			遠藤和子氏提供
浮世絵	富山城雪解清水 明治二十三年版（三枚続）	楊洲周延画	明治23年（1890）	高志の国文学館
色紙	「花は一時 人は一生」	遠藤和子		高志の国文学館
書籍	物語・佐々成政（北日本新聞社）	遠藤和子	昭和57年（1982）	高志の国文学館
パネル（写真）	佐々堤にて			遠藤和子氏提供
書籍	〈悲運の知将〉の実像 佐々成政（サイマル出版会）	遠藤和子	昭和61年（1986）	高志の国文学館

種別	資料（作品）名	作者	年代	所蔵
書籍	人物文庫　佐々成政　悲運の知将（学陽書房）	遠藤和子	平成11年（1999）	高志の国文学館
書籍	史伝　佐々成政　学研M文庫（学習研究社）	遠藤和子	平成14年（2002）	高志の国文学館
書籍	佐々成政（学陽書房）	遠藤和子	平成22年（2010）	高志の国文学館
書籍	創作劇「佐々成政」二幕　台本	宮島春彦	平成元年（1989）	富山県立図書館
パンフレット	富山市制百周年記念演劇公演「佐々成政」	宮島春彦	平成元年（1989）6月1日	高志の国文学館
冊子	ざら峠　佐々成政研究会会報　第1号、第3号	佐々成政研究会	平成3年（1991）1月、11月	高志の国文学館
パネル（写真）	佐々成政夫妻、岳星院の位牌（慈眼寺内）			遠藤和子氏提供
ノート	『家光大奥・中の丸の生涯』取材ノート（相馬取材）	遠藤和子		個人
ノート	『家光大奥・中の丸の生涯』取材ノート（東京取材）	遠藤和子		個人
ノート	『家光大奥・中の丸の生涯』取材ノート（高崎・秩父取材）	遠藤和子		個人
ノート	『家光大奥・中の丸の生涯』構想ノート　7冊	遠藤和子		個人
原稿	『家光大奥・中の丸の生涯』目次、二章～六章、付録、後がき	遠藤和子		高志の国文学館
原稿	『家光大奥・中の丸の生涯』校正ゲラ	遠藤和子		高志の国文学館
書籍	家光大奥・中の丸の生涯　狩野探幽と尽くした徳川太平の世（小石川ユニット、発売：展望社）	遠藤和子	平成25年（2013）	高志の国文学館
色紙	「生涯青春」	遠藤和子		高志の国文学館
映像	インタビュー映像「ふるさとに学ぶ　遠藤和子」（高志の国文学館）	遠藤和子	令和3年（2021）	高志の国文学館
木崎さと子				
原稿（ノート）	『裸足』（初稿）	木崎さと子		個人
原稿	『裸足』（完成稿）	木崎さと子		個人
原稿	校正刷『裸足』（再校）	木崎さと子		個人
雑誌	文學界　第34巻第12号『裸足』（文藝春秋）	木崎さと子ほか	昭和55年（1980）12月	個人
書籍	裸足（文藝春秋）	木崎さと子	昭和57年（1982）	高志の国文学館
記念品	第51回文學界新人賞受賞記念の腕時計（SEIKO）	—	昭和55年（1980）11月	個人

種別	資料（作品）名	作者	年代	所蔵
原稿	「結縁の町」（のちに「夏草」に改題）	木崎さと子		個人
雑誌	文學界　昭和59年11月号（青桐）（文藝春秋）	木崎さと子ほか	昭和59年（1984）11月	個人
書籍	青桐（文藝春秋）	木崎さと子	昭和60年（1985）	高志の国文学館
書籍	青桐　英訳版（KODANSHA INTERNATIONAL）	木崎さと子著、Carol A. Flath訳	昭和60年（1985）2月6日	個人
書簡	「木崎さと子先生の芥川賞受賞を祝う会の御案内」葉書	木崎さと子先生の芥川賞受賞を祝う会	平成2年（1990）	高志の国文学館
書籍	海と蝋燭（福武書店）	木崎さと子	昭和60年（1985）	高志の国文学館
メモ	『沈める寺』人物設定メモ、構想メモ	木崎さと子		個人
雑誌	新潮　第84巻第2号（沈める寺）（新潮社）	木崎さと子ほか	昭和62年（1987）2月	個人
書籍	沈める寺（新潮社）	木崎さと子	昭和62年（1987）	高志の国文学館
愛用品	「翼のとれた天使像」			個人
書籍	鏡の谷（新潮社）	木崎さと子	平成2年（1990）	高志の国文学館
書籍	光る沼（新潮社）	木崎さと子	平成8年（1996）	高志の国文学館
書籍	愛の聖母子（講談社）	木崎さと子	昭和63年（1988）	高志の国文学館
書籍	いのちの波にかがやく（女子パウロ会）	木崎さと子	平成3年（1991）	高志の国文学館
書籍	ビジュアル版　聖書物語（講談社）	木崎さと子	平成12年（2000）	高志の国文学館
書籍	小説　聖書の女性たち（日本基督教団出版局）	木崎さと子	平成16年（2004）	高志の国文学館
書籍	ダーチャのいのり（女子パウロ会）	木崎さと子	平成17年（2005）	高志の国文学館
書籍	現代社会への挑戦　今を生きる女子修道会（女子パウロ会）	取材執筆：木崎さと子、編著：女子パウロ会	平成18年（2006）	個人
書籍	キリシタンの祈り（女子パウロ会）	木崎さと子文、小山硬画	平成20年（2008）	高志の国文学館
書籍	路上からの復活（女子パウロ会）	木崎さと子	平成22年（2010）	高志の国文学館
雑誌	あけぼの　第32巻3号　聖パウロ女子修道会）	木崎さと子ほか	昭和62年（1987）3月	個人
雑誌	あけぼの　第39巻12号（聖パウロ女子修道会）	木崎さと子ほか	平成6年（1994）12月	個人
雑誌	あけぼの　第50巻8号（聖パウロ女子修道会）	木崎さと子ほか	平成17年（2005）8月	個人

種別	資料（作品）名	作者	年代	所蔵
雑誌	あけぼの　第57巻2号、3号、6号（聖パウロ女子修道会）	木崎さと子ほか	平成24年（2012）	個人
愛用品／書籍	口語　新約聖書（日本聖書協会）		昭和29年（1954）	個人
愛用品	万年筆			個人
愛用品	ペーパーナイフ　ペーパーウェイト			個人
色紙	「〝愛〟を　愛するために…」	木崎さと子		高志の国文学館
書籍	波　ハーフ・ウェイ……（文藝春秋）	木崎さと子	昭和63年（1988）	高志の国文学館
書籍	山賊の墓（講談社）	木崎さと子	平成元年（1989）	高志の国文学館
書籍	幸福の谷（文藝春秋）	木崎さと子	平成2年（1990）	高志の国文学館
書籍	跡なき庭に（文藝春秋）	木崎さと子	平成3年（1991）	高志の国文学館
書籍	時の雫（中央公論社）	木崎さと子	平成3年（1991）	高志の国文学館
書籍	誕生石物語（河出書房新社）	木崎さと子	平成11年（1999）	高志の国文学館
書籍	星降る街の物語（河出書房新社）	木崎さと子	平成11年（1999）	高志の国文学館
書籍	蘇りの森（文藝春秋）	木崎さと子	平成11年（1999）	高志の国文学館
書籍	緋の城（新潮社）	木崎さと子	平成14年（2002）	高志の国文学館
書籍	美しい出会い　道ひとすじの人々を訪ねて（女子パウロ会）	木崎さと子	昭和63年（1988）	高志の国文学館
書籍	いのちの海　生命科学者中村桂子との往復書簡（人文書院）	木崎さと子、中村桂子	平成3年（1991）	個人
書籍	もうひとつの幸福（海竜社）	木崎さと子	昭和62年（1987）	個人
書籍	幸福の小さな扉（河出書房新社）	木崎さと子	平成6年（1994）	個人
書籍	自分らしく生きること　自分らしく死ぬこと（海竜社）	木崎さと子	平成7年（1995）	個人
書籍	夢の記憶　ある神父への手紙（岩波書店）	木崎さと子	平成9年（1997）	高志の国文学館
書籍	うみをわたったこぶた（岩波書店）	木崎さと子文、黒井健絵	平成16年（2004）	高志の国文学館
雑誌	とやま文学　第23号（富山県芸術文化協会）	富山県芸術文化協会編	平成17年（2005）3月	高志の国文学館
美術品	【絵画作品】	古川通泰	昭和63年（1988）	個人
美術品	【ガラス作品】	野田雄一	—	個人

種別	資料（作品）名	作者	年代	所蔵
パネル	「「祈りの過程展」関連パネル」	—	—	個人
野村玉枝				
冊子（文集）	立野ケ原　第一輯	荒井光隆編集、吉井玉枝ほか	大正12～13年（1923～1924）	個人
パネル（写真）	荒井光隆先生と小学校6年生当時の吉井玉枝ほか		大正6年～13年（1917～1924）	荒井武光氏提供
色紙	短歌「あさけ食す…」	荒井美篤香（光隆）		荒井武光氏
パネル（写真）	学生時代の玉枝		昭和3年～7年（1928～1932）	野村毅氏提供
ノート	詩、俳句、短歌の抜粋ノート	野村玉枝	昭和4年頃	野村毅氏
ノート	歌稿ノート	野村玉枝	昭和4年～5年頃（1929～1930）	野村毅氏
雑誌	心の花　37巻5号、37巻6号（竹柏会出版部）	吉井玉枝ほか	昭和8年（1933）	個人
雑誌	心の花　44巻7号、44巻10号（竹柏会出版部）	野村玉枝ほか	昭和15年（1940）	個人
雑誌	心の花（竹柏会）	野村玉枝ほか	平成3年（1991）3月	個人
ノート	歌稿「うた草」	野村玉枝	昭和9年4月～12月末（清書は昭和10年正月2日）	野村毅氏
ノート	歌稿［無題］	野村玉枝	昭和10年～12年頃	野村毅氏
書籍	新万葉集　第9巻（改造社）	改造社編	昭和13年（1938）	富山県立図書館
アルバム（写真）	東京特設中等教員養成所関連 アルバム		昭和15年～17年頃（1940～1942）	野村毅氏
パネル（写真）	靖国神社合祀記念写真			野村毅氏提供
書籍	歌集　雪華（湯川弘文社）	野村玉枝	昭和16年（1941）	高志の国文学館
冊子（楽譜）	聖戦歌曲集　雪華　第一輯（日本楽譜出版社）	野村玉枝作歌、平井保喜作曲	昭和18年（1943）1月	個人
雑誌	ほまれの家（恩賜財団軍人援護會）	大森久彌編輯発行	昭和16年（1941）10月	野村毅氏
書籍	歌文集　御羽車（八興商會）	野村玉枝	昭和17年（1942）	高志の国文学館
ノート	雑記帳	野村玉枝	（年代さまざま）	野村毅氏
雑誌	婦人倶楽部　第23巻4号、10号、12号（大日本雄辯會講談社） 講談倶楽部　第32巻12号（大日本雄辯會講談社）	茂木茂編輯発行 萱原宏一編輯発行	昭和17年（1942） 昭和17年（1942）12月	野村毅氏 野村毅氏

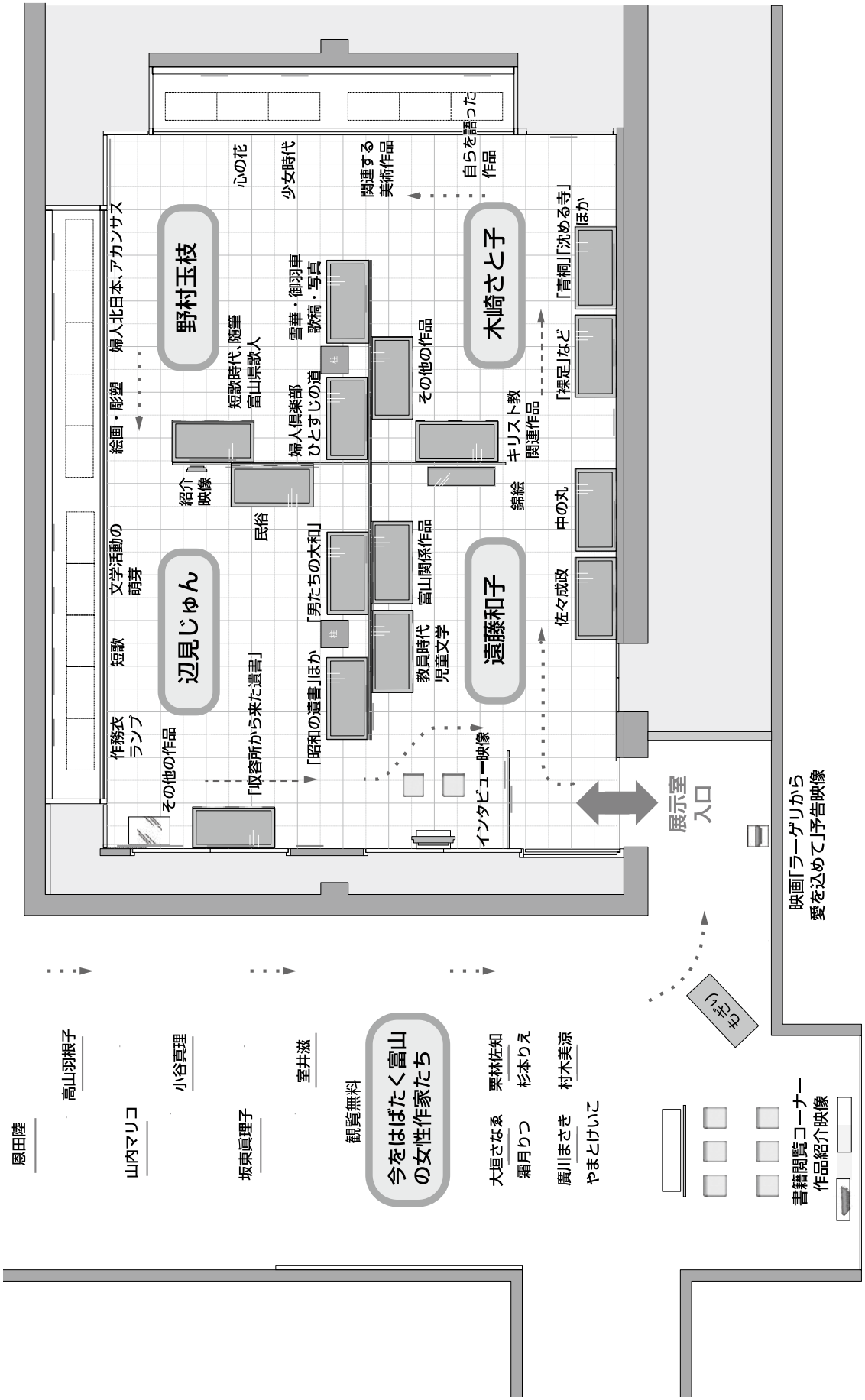
種別	資料（作品）名	作者	年代	所蔵
ノート	歌稿「詠草」	野村玉枝		野村毅氏
歌稿	「野村玉枝第二歌集」歌稿	野村玉枝		野村毅氏
書籍	歌集　一筋の道（八雲書店）	野村玉枝	昭和20年（1945）	野村毅氏
雑誌	短歌時代　第1巻第4号（短歌時代社）		昭和21年（1946）11月	富山県立図書館
書籍	短歌時代社自選年刊歌集　1949年（短歌時代社）	広川親義編	昭和24年（1949）	富山県立図書館
書籍	年刊歌集　昭和35年版（富山県歌人連盟）	逢坂敏男、木村玄外編	昭和35年（1960）	高志の国文学館
雑誌	富山県歌人　第5号（富山県歌人連盟）		昭和38年（1963）8月	富山県立図書館
雑誌	富山県歌人　第25号　富山県歌壇総覧（富山県歌人連盟）	村田守也編集	昭和61年（1986）3月	高志の国文学館
雑誌	富山県歌人　第35号（富山県歌人連盟）		平成7年（1995）3月	富山県立図書館
ノート	歌稿の清書集成版	野村玉枝	昭和36年（1961）頃か	野村毅氏
書籍	随筆集　石南花の記（短歌新聞社）	野村玉枝	昭和37年（1963）	野村毅氏
冊子	婦人北日本の歌	野村玉枝選	昭和28年（1953）	南砺市立図書館
冊子	婦人北日本の歌　その二、第三集	野村玉枝選	昭和28年（1953）	個人
パネル（新聞）	「座談会　短歌と婦人生活」（『婦人北日本』第246号　第3面）		昭和30年（1955）3月11日	富山県立図書館提供
パネル（新聞）	「野村玉枝選　婦人北日本歌壇」（『婦人北日本』第281号　第2面）		昭和30年（1955）12月2日	富山県立図書館提供
パネル（新聞）	「野村玉枝選　アカンサス歌会」「アカンサス会宣言」（『婦人北日本』第316号　第1面）		昭和31年（1956）8月6日	富山県立図書館提供
雑誌	アカンサス　五周年記念号　第5号	野村玉枝編集発行	昭和33年（1958）10月	個人
パネル（写真）	直筆短歌「ばらの花…」	野村玉枝		藤井沙地氏提供
雑誌	富山県歌人　創刊号（富山県歌人連盟）		昭和36年（1961）1月	高志の国文学館（久泉）
歌稿	アカンサス短歌会の添削原稿	野村玉枝	平成9年～10年（1997～1998）	野村毅氏
書籍	アカンサス短歌会　平成十一年（アカンサス短歌会）	野村玉枝ほか	平成11年（1999）	野村毅氏
書籍	アカンサス短歌会　平成十二年、平成十四年（アカンサス短歌会）	野村玉枝ほか	平成12年（2000）、平成15年（2003）	砺波市立図書館

種別	資料（作品）名	作者	年代	所蔵
書籍	平成十七年度　アカンサス短歌会歌集（アカンサス短歌会）	野村玉枝ほか	平成17年度	藤井沙地氏
書籍	平成二十六年度　石南花ノアカンサス短歌会合同歌集（アカンサス短歌会、石南花短歌会）	野村玉枝ほか	平成26年度	藤井沙地氏
雑誌	歌謡芸術　第3巻第6号（日本歌謡芸術家協会）	益子一彦編集	昭和32年（1957）6月	高志の国文学館
書籍	むぎや節有情（北日本出版社）	野村玉枝ほか	昭和47年（1972）	高志の国文学館
記念品	「第2回　川の情景を詠む短歌」一般の部佳作記念盆	野村玉枝	平成11年（1999）	野村毅氏
絵画	人物習作（油彩画）	野村玉枝		野村毅氏
パネル（写真）	学生時代の玉枝（絵を描く）		昭和3年～7年（1928～1932）	野村毅氏提供
塑像	私の顔（石膏像）	野村玉枝	昭和26年（1951）3月28日	野村毅氏
パネル（写真）	石膏像「私の顔」を制作する野村玉枝		昭和26年（1951）頃か	野村毅氏提供
辺見じゅん				
雑誌	箱庭　第6巻第11号　第6回卒業生記念号（天沼中学校文学クラブ）	宮沢信子責任編集	昭和30年（1955）4月	高志の国文学館
パネル（写真）	中学3年　春の遠足　猿島にて		昭和29年（1954）頃	個人提供
雑誌	泰山木　創刊号（あかり文芸会）	道嶋一男編集発行	昭和31年（1956）1月	高志の国文学館
書簡	同人あて葉書	角川眞弓	昭和30年（1955）10月21日	高志の国文学館
書簡	友人あて封書	角川眞弓	昭和32年（1957）8月16日	高志の国文学館
パネル（写真）	昭和33年3月　父写す	角川源義撮影	昭和33年（1958）3月	個人提供
書籍	記憶の種子（芦笛社）	清水迪、角川眞弓	昭和38年（1963）	高志の国文学館
書籍	花冷え（七曜社）	清水眞弓	昭和39年（1964）	高志の国文学館
書籍	日本の伝説24　伝説（角川書店）　富山の	辺見じゅん・大島広志・石崎直義	昭和52年（1977）	高志の国文学館
書籍	たおやかな鬼たち（角川書店）	辺見じゅん	昭和54年（1979）	高志の国文学館
書籍	呪われたシルク・ロード（角川書店）	辺見じゅん	昭和50年（1975）	高志の国文学館
書籍	はしりかねと八つの村のものがたり（文藝春秋）	辺見じゅん、北井一夫	昭和52年（1977）	高志の国文学館

種別	資料（作品）名	作者	年代	所蔵
書籍	ふるさと幻視行（講談社）	辺見じゅん	昭和53年（1978）	高志の国文学館
ノート	取材ノート	辺見じゅん	昭和51年3月7日～11日	高志の国文学館
音響資料	民話取材テープ			高志の国文学館
書籍	探訪北越雪譜の世界（角川書店）	辺見じゅん／監修：宮榮二	昭和57年（1982）	高志の国文学館
書籍	花子のくにの歳時記（小学館）	辺見じゅん	平成3年（1991）	高志の国文学館
書籍	新鋭歌人叢書　雪の座（角川書店）	辺見じゅん	昭和51年（1976）	高志の国文学館
色紙	短歌「遠山に…」	辺見じゅん	—	高志の国文学館
書籍	歌集　水祭りの桟橋（思潮社）	辺見じゅん	昭和56年（1981）	高志の国文学館
書籍（特装本）	闇の祝祭（著者特装本）	辺見じゅん	昭和62年（1987）	高志の国文学館
記念品	第12回現代短歌女流賞受賞記念品			高志の国文学館
色紙	短歌「花々に…」	辺見じゅん		高志の国文学館
色紙	短歌「黄昏の…」	辺見じゅん		高志の国文学館
書籍	幻花（著者特装本）	辺見じゅん	平成8年（1996）	高志の国文学館
書籍	秘色　辺見じゅん歌集（砂子屋書房）	辺見じゅん	平成13年（2001）	高志の国文学館
原稿	歌稿「蛍の時間」	辺見じゅん	—	高志の国文学館
書籍	天涯の紺　辺見じゅん歌集（角川書店）	辺見じゅん	平成22年（2010）	高志の国文学館
雑誌	弦　創刊号～第58号（弦短歌会）		平成19年（2007）～令和4年（2022）	高志の国文学館
書籍	男たちの大和　上・下（角川書店）	辺見じゅん	昭和58年（1983）	高志の国文学館
パネル（写真）	新田次郎文学賞受賞式		昭和59年（1984）	個人提供
音響資料	『男たちの大和』取材テープ			高志の国文学館
原稿	『男たちの大和』取材テープ起こし原稿（内田貢氏関連）			高志の国文学館
パネル（写真）	呉の戦艦大和戦没者慰霊碑前にて			高志の国文学館
原稿	『男たちの大和』原稿	辺見じゅん	—	高志の国文学館
映像資料	DVD　男たちの大和／YAMATO（東映）	原作：辺見じゅん、監督・脚本：佐藤純彌	平成17年（2005）8月	高志の国文学館
書籍	決定版　男たちの大和　上・下（角川春樹事務所）	辺見じゅん	平成17年（2005）	高志の国文学館

種別	資料（作品）名	作者	年代	所蔵
書籍	小説　男たちの大和（角川春樹事務所）	辺見じゅん	平成18年（2006）	高志の国文学館
書籍	昭和の遺書（角川書店）	辺見じゅん	昭和62年（1987）	高志の国文学館
原稿	『昭和の遺書』あとがき原稿	辺見じゅん	—	高志の国文学館
書籍	収容所から来た遺書（文藝春秋）	辺見じゅん	平成1年（1989）	高志の国文学館
書籍	ダモイ　遥かに（メディアパル）	辺見じゅん	平成20年（2008）	高志の国文学館
パネル（写真）	講談社ノンフィクション賞授賞式		平成元年（1989）	個人提供
原稿	取材テープ起こし原稿「シベリア関連　後藤孝敏氏」		昭和62年（1987）5月	高志の国文学館
ノート	収容所から来た遺書ノート	辺見じゅん	—	高志の国文学館
原稿（校正刷）	『収容所から来た遺書』校正原稿	辺見じゅん	—	高志の国文学館
パンフレット	収容所から来た遺書　33年目の脱字（劇団俳優座）	辺見じゅん原作、西木一夫演出	—	高志の国文学館
書籍	レクイエム・太平洋戦争　愛しき命のかたみに（PHP研究所）	辺見じゅん	平成6年（1994）	高志の国文学館
書籍	昭和の遺書　南の戦場から（文藝春秋）	辺見じゅん	平成14年（2002）	高志の国文学館
書籍	よみがえる昭和天皇　御製で読み解く87年（文藝春秋）	辺見じゅん・保坂正康	平成24年（2012）	高志の国文学館
書籍	愛することと歌うこと　女流　歌人・俳人の肖像（美術公論社）	辺見じゅん	昭和61年（1986）	高志の国文学館
書籍	初めて語ること　賢師歴談（文藝春秋）	辺見じゅん	昭和62年（1987）	高志の国文学館
書籍	大下弘　虹の生涯（新潮社）	辺見じゅん	平成4年（1992）	高志の国文学館
書籍	夢、未だ盡きず　平木信二と吉岡隆徳（文藝春秋）	辺見じゅん	平成10年（1998）	高志の国文学館
書籍	夕鶴の家　父と私（幻戯書房）	辺見じゅん	平成24年（2012）	高志の国文学館
美術品	大津絵（辺見じゅん旧蔵）			高志の国文学館
愛用品	ティファニー製ランプ（辺見じゅん旧蔵）			高志の国文学館
愛用品	作務衣（辺見じゅん愛用）			高志の国文学館
映像	映画「ラーゲリより愛を込めて」予告映像		令和4年（2022）	TOHOマーケティング提供

□企画展示室平面図


野村玉枝
辺見じゅん
木崎さと子
遠藤和子
婦人北日本、アカンサス
絵画・彫塑
文学活動の萌芽
短歌
作務衣
ランプ
その他の作品
心の花
少女時代
関連する美術作品
自らを語った作品
短歌時代、随筆
富山県歌人
雪華・御羽車
歌稿・写真
婦人倶楽部
ひとすじの道
その他の作品
紹介映像
民俗
「男たちの大和」
「昭和の遺書」ほか
「収容所から来た遺書」
富山関係作品
教員時代
児童文学
インタビュー映像
キリスト教関連作品
錦絵
「裸足」など
「青桐」「沈める寺」ほか
中の丸
佐々成政
展示室入口
映画「ラーゲリから愛を込めて」予告映像
恩田陸
高山羽根子
山内マリコ
小谷真理
坂東真理子
室井滋
観覧無料
今をはばたく富山の女性作家たち
大垣さなゑ
霜月りつ
栗林佐知
杉本りえ
廣川まさき
やまとけいこ
村木美涼
書籍閲覧コーナー
作品紹介映像

（2）開館10周年記念企画展
「荒井良二のＰＩＣＴＵＲＥ　ＢＯＯＫ〈絵・本〉」

大川原竜一

絵本というと、いまだに「子どものためのもの」、あるいは「子どもの教育のためのもの」だと思われることが多いのを、ぼくは残念に感じています。

もちろん、そういう「子どもの役に立つ絵本」も世の中にはある程度必要だと思います。でも、絵本というのは、本来はもっと自由で楽しいものではないでしょうか。（中略）

「子どものもの」と「大人のもの」という枠組みすらなくしてしまうくらい自由なものが絵本であり、それこそ絵本がもつ力だとぼくは思います。

（『ぼくの絵本じゃあにぃ』ＮＨＫ出版、２０１４年より）

世界で注目を集める絵本作家のひとり、荒井良二（あらいりょうじ）（山形県生まれ、１９５６～）。日本大学芸術学部美術学科を卒業後、イラストレーターとして活躍。１９９０年に『ＭＥＬＯＤＹ』（トムズボックス）を発表し、本格的に絵本を作りはじめる。96年の『うそつきのつき』（作：内田麟太郎、文溪堂）で第46回小学館児童出版文化賞、98年の『なぞなぞのたび』（作：石津ちひろ、フレーベル館）でボローニャ国際児童図書展特別賞、また２０１６年の『きょうはそらにまるいつき』（作・絵：荒井良二、偕成社）で第22回日本絵本賞大賞など、国内外の数々の賞を受賞し、早くから注目される。

荒井が創作する絵本は国境をこえて多くの人を魅了し、２００５年には、児童文学や青少年向けの文学作品にあたえられる、スウェーデンの世界的な文学賞であるアストリッド・リンドグレーン記念文学賞を日本人ではじめて受賞した。明るく鮮やかな色使いと、斬新かつ大胆な作風が高く評価されており、２００１年のアメリカ同時多発テロ事件をうけて作られた『はっぴいさん』（作・絵：荒井良二、偕成社、２００３年）、東日本大震災の年に描かれた『あさになったので まどをあけますよ』（作・絵：荒井良二、偕成社、２０１１年）など、時代をみつめた絵本作品は大きな反響をよんだ。本質的なものをそっと差しだすような荒井の作品は、誰の心にも響く深い感動を届けてくれる。これまでに一〇〇冊以上の絵本を手がけ、いまも個展やワークショップを精力的に開いている。

本展は、高志の国文学館開館10周年を記念した絵本展であり、「はじまるよ！はじめての絵本展」をテーマにかかげた。豊かな色彩と繰り返される言葉のリズムが特徴的な荒井の絵本は、子どものみならず幅広い世代に人気を誇っている。初期から近年までの代表作を通して、〝何気ない日常の中にこそ生きる喜びや希望がある〟ことに気づかせてくれる、荒井の絵本の世界を紹介した。

本展の導入となるエントランス展示では、荒井の絵本のなかに入りこむようなワクワクする会場に設えた。まず目に入るのは、荒井が本展のために手描きしたゲートであった。企画展開幕の一週間前に来館していただき、高さ約3メートルのゲートに即興で描いていただいた。ゲートは、絵筆や鉛筆のみならず、手のひらや指、爪を使って大胆に色がつけられ、キュートな子どもたちやメルヘンな情景が描かれた色彩豊かなものであり、くぐった観覧者を荒井ワールドにいざなう仕掛けとした。また、壁一面に『きょうのぼくはどこまでだってはしれるよ』（作・絵：荒井良二、ＮＨＫ出版、２０１９年）の大型パネルを掲示し、『森の絵本』（作：長田弘、絵：荒井良二、講談社、１９９９年、第31回講談社出版文化賞受賞）をもとに新たに制作した朗読映像を上映した。

さらに、ユニバーサル ミュージックの協力を得て、森山直太朗氏のミュージック・ビデオ「花鳥風月」で撮影された、荒井のライブペインティング映像を上映するコーナーを設けた。「音楽ライブと同じような感じ」で「キャンパスを真ん中に、そこにいる人たちと対話しているような……僕もお客さんたちも無言だけど、見えない対話が行われるようなライブペインティング

が、一番いい」（「vol・37 絵本作家 荒井良二さん」（「mi:te［ミーテ］」絵本作家インタビュー、https://mi-te.kumon.ne.jp/contents/article/12-73/、２０２２年1月12日閲覧））と、荒井自身が語るライブペインティングの様子を観覧者にみてもらえるようにした。

企画展示室内では、荒井の初期作品『ユックリとジョジョニ』から近年の『こどもたちはまっている』までの、代表作の絵本原画を一堂に展観した。

『ユックリとジョジョニ』（作・絵：荒井良二、ほるぷ出版、１９９１年）は、荒井がはじめて商業出版として手がけた絵本であり、世界的な絵本の新人賞であるエズラ・ジャック・キーツ賞にノミネートされた作品である。『こどもたちはまっている』（作・絵：荒井良二、亜紀書房、２０２０年、第26回日本絵本賞受賞）は、絵本作家の長新太氏へのオマージュとなる、荒井の原点がつまった作品である。すべての原画には絵本の文章をそのままキャプションとして付け、観覧者が絵本を読むように鑑賞できる展示とした。くわえて絵本の下絵や創作メモ、スケッチ、ドローイング、立体作品などを公開し、荒井の絵本づくりの魅力にせまる貴重な資料を出展した。

なお今回の企画展では、会場の各所に、荒井の「作品に寄せたメッセージ」と創作活動についての「ことば」をパネルでかかげ、荒井の想いを観覧者に届ける工夫をした。さらに「ユックリとジョジョニ」「はっぴぃさん」「たいようオルガン」「あさになったので まどをあけますよ」「きょうもそらにまるいつき」「こどもたちはまっている」の6作品については、本展オリジナルのインタビュー映像を制作。荒井自身が各作品の制作背景や、創作にかける情熱について語った影像を流した。これにより荒井作品の魅力を再発見することができた。

ぼくは「絵本の終わり」は「何かの始まり」につながらなければいけないと思いながらいつも絵本を描いています。読者が絵本を読み終わったときに、「さあ、始めるぞ」という気持ちをちょっとでももてるようなものにしたいのです。（中略）どんな人たちもそれぞれの環境で生きていて、「楽しい」や「嬉しい」という気持ちはもっているということを描いているのが、ぼくの絵本なのかなとは思っています。

（『ぼくの絵本じゃあにぃ』ＮＨＫ出版、２０１４年）

企画展示室のウォールケース内には、先にふれた『はっぴぃさん』と、第1回ＪＢＢＹ（日本国際児童図書評議会）賞を受賞し、２００８年のＩＢＢＹ（国際児童図書評議会）オナーリスト（世界優良図書）に選定された『たいようオルガン』（作・絵：荒井良二、アートン、２００７年／偕成社、２００８年）という、世界的に評価の高い2作品の原画全点を壁一面にかかげた。ここでは、さらに束見本（実際の仕上がりと同じ材料、ページ数で製本した白紙の見本）に描かれたラフも展示。荒井は、絵本をつくるときに、物語全体のバランスを考えるためにこれを必ず描くという。絵を描く段階で修正される場合もあるが、ラフの段階では、文章と絵のイメージはすでに完成されている様子がうかがえた。

また、資料をみるのみならず、荒井の制作の舞台裏を知ってもらう楽しい展示を展開するべく、荒井のアトリエ（作業場）を再現したコーナーも設けた。色とりどりの絵の具が飛びちった作業机にあふれかえる画材。整然とならべられた鉛筆、マーカー、修正液に、色鉛筆の折れた芯や、コラージュに使った色紙の切れ端。それらと一緒におもちゃやオブジェが置かれている。絵本が生みだされる空間を垣間見ることができた。

さらにこのコーナーの展示ケース内には、身のまわりの文具や日用品、使いおわって固まった絵の具にまで、何にでも顔を描いた「顔コレクション」や、出版される絵本以外にときどきつくる手製の絵本、ドローイング（線画）、毎晩寝る前におこなう名画のスケッチ（模写）のほか、荒井が表紙の自画像のイラストを描いたアストリッド・リンドグレーン記念文学賞の受賞者紹介のパンフレットや、その賞状を模したポストカードなど、同賞の記念品を出品した。

ついで、東日本大震災がおきた２０１１年に刊行された『あさになったので まどをあけますよ』（作・絵：荒井良二、偕成社、第59回産経児童出版文化賞大賞受賞）と、それと対になる『きょうはそらにまるいつき』の原画を展示したコーナーでは、束見本に描かれたラフのほか、絵本を描く際につくっているメモ書きを公開し、文章とページの割り付けを試行錯誤している過程

をみてとれるようにした。またここでは、アームストロング青葉幼稚園の年長児が両作品を読んで描いた絵をコラボ出展することができた。

本企画展は、国際的に活躍する絵本作家・荒井良二の絵本の魅力を充分に紹介できた。それにとどまらず、富山県美術館や射水市大島絵本館と連携したイベントやプレゼント企画、また近隣の幼稚園に作品展示を協力してもらうなど初の試みにとりくんでおり、高志の国文学館におけるはじめての絵本展にふさわしい有意義なものであった。

□主な展示物

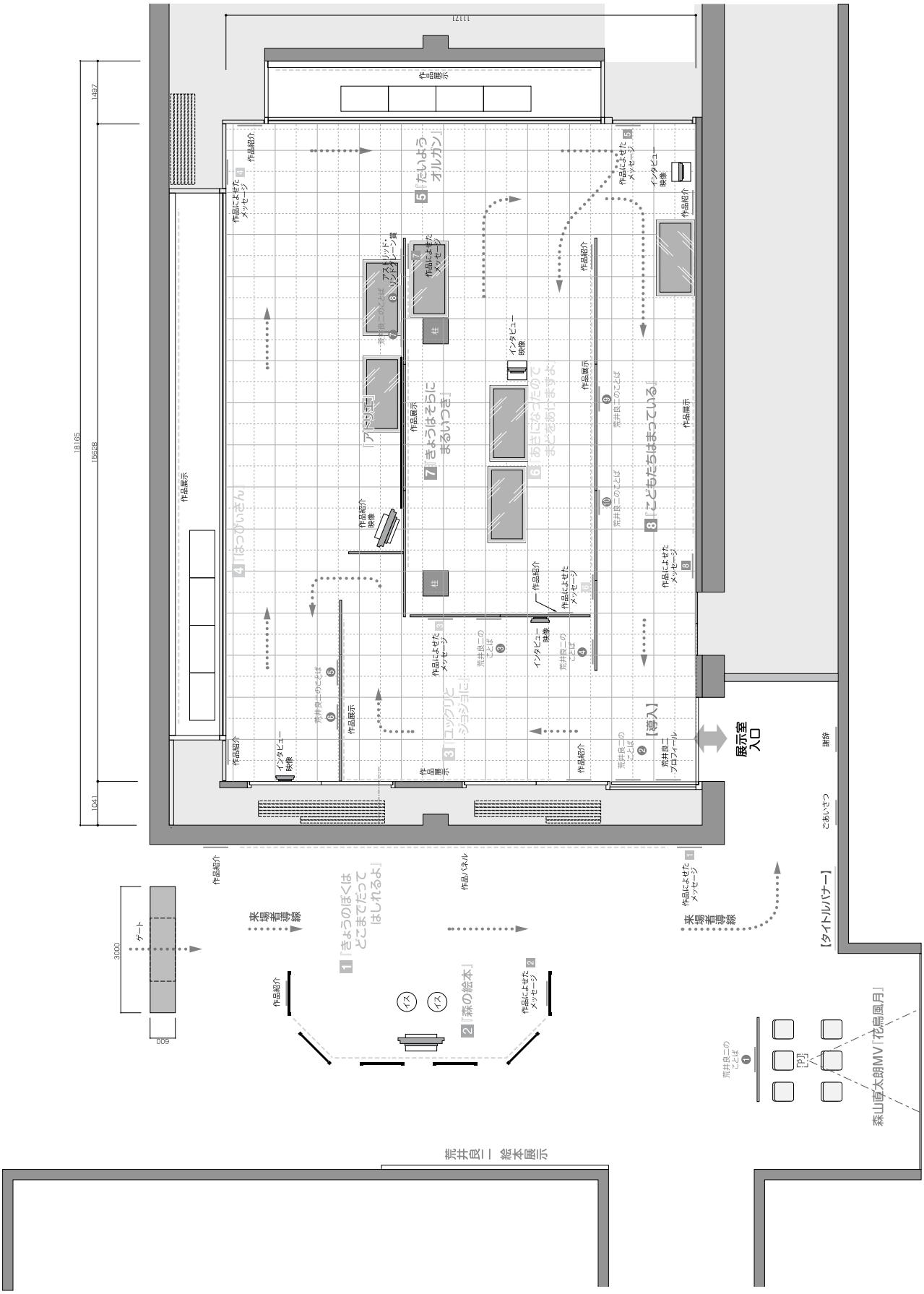
種別	資料（作品）名	作者	初出・年代	所蔵
エントランス（ロビー）				
立体物	荒井良二　手描き　ゲート	荒井良二	令和4年（2022）6月18・19日	—
書籍	荒井良二『きょうのぼくはどこまでだってはしれるよ』	NHK出版	平成31年（2019）	高志の国文学館
パネル	「きょうのぼくはどこまでだってはしれるよ」	NHK出版	令和4年（2022）6月25日	NHK出版
パネル	「作品に寄せたメッセージ①きょうのぼくはどこまでだってはしれるよ」（荒井さんのこの10年を振り返る「illustration」№224より）	高志の国文学館	令和4年（2022）6月25日	—
映像・動画	朗読映像「森の絵本」	高志の国文学館	令和4年（2022）6月19日録音	講談社
パネル	「作品に寄せたメッセージ②森の絵本」（荒井さんのこの10年を振り返る「illustration」№224より）	高志の国文学館	令和4年（2022）6月25日	—
映像・動画	映像「森山直太朗ミュージックビデオ「花鳥風月」」			ユニバーサルミュージック
パネル	「荒井良二のことば❶」（「vol・37絵本作家　荒井良二さん」「mi：te（ミーテ）」より）	高志の国文学館	令和4年（2022）6月25日	—
企画展示室内　導入				
パネル	荒井良二　プロフィール	高志の国文学館	令和4年（2022）6月25日	—
パネル	「荒井良二のことば❷」（「想像力で未来を描くということ」「ぼくの絵本じゃあにぃ」より）	高志の国文学館	令和4年（2022）6月25日	—
「ユックリとジョジョニ」コーナー				
書画	原画「ユックリとジョジョニ」	荒井良二	平成2年（1991）	安曇野ちひろ美術館
パネル	「作品に寄せたメッセージ③ユックリとジョジョニ」（「荒井良二」『絵本作家という仕事』より）	高志の国文学館	令和4年（2022）6月25日	—
パネル	「荒井良二のことば❸」（「vol・17荒井良二　絵本を描くときは小学校1年生の「僕」に会いに行く。」「FUN ART STUDIO」より）	高志の国文学館	令和4年（2022）6月25日	—
映像・動画	荒井良二インタビュー映像「「ユックリとジョジョニ」を語る」	高志の国文学館	令和4年（2022）6月19日撮影	高志の国文学館
パネル	「荒井良二のことば❹」（「まえがき」『ぼくの絵本じゃあにぃ』より）	高志の国文学館	令和4年（2022）6月25日	—
「はっぴぃさん」コーナー				
パネル	「荒井良二のことば❺」（「荒井良二インタビュー　日常を旅して、旅を日常する」『Pooka＋荒井良二　日常じゃあにぃ』より）	高志の国文学館	令和4年（2022）6月25日	—
パネル	「荒井良二のことば❻」（「vol・37絵本作家　荒井良二さん」「mi：te（ミーテ）」より）	高志の国文学館	令和4年（2022）6月25日	—
映像・動画	荒井良二インタビュー映像「「はっぴぃさん」「たいようオルガン」を語る」	高志の国文学館	令和4年（2022）6月19日撮影	高志の国文学館
書画	原画「はっぴぃさん」	荒井良二	平成15年（2003）	個人蔵
書画	東見本に描かれたラフ「はっぴぃさん」	荒井良二	平成15年（2003）	個人蔵
立体物	布の鳥ペア	荒井良二	—	個人蔵
パネル	荒井良二　手描き作品　「LOVE＆PEACE」	荒井良二	令和4年（2022）6月18・19日	—
パネル	「作品に寄せたメッセージ④はっぴぃさん」（「ぼくは絵本をこうやって描いている」『ぼくの絵本じゃあにぃ』より）	高志の国文学館	令和4年（2022）6月25日	—

種別	資料（作品）名	作者	初出・年代	所蔵
「アトリエ」コーナー				
パネル	「アトリエ写真」	高志の国文学館	令和4年（2022）6月25日	—
映像・動画	荒井良二　作品紹介映像	荒井良二	—	個人蔵
立体物	絵筆、鉛筆、手製パレット、アクリル絵具チューブ	荒井良二	—	個人蔵
パネル	「荒井良二のことば❼」（「ぼくは絵本をこうやって描いている」『ぼくの絵本じゃあにぃ』より）	高志の国文学館	令和4年（2022）6月25日	—
パネル	「荒井良二のことば❽」「ぼくは絵本をこうやって描いている」『ぼくの絵本じゃあにぃ』より）	高志の国文学館	令和4年（2022）6月25日	—
立体物	顔コレクション　石	荒井良二	—	個人蔵
立体物	顔コレクション　小さい鉛筆（箱入り）	荒井良二	—	個人蔵
立体物	顔コレクション　陶製飾り	荒井良二	—	個人蔵
立体物	顔コレクション　雪だるま	荒井良二	—	個人蔵
立体物	顔コレクション　アクリル絵具チューブ	荒井良二	—	個人蔵
立体物	顔コレクション　絵具の塊（顔つき）	荒井良二	—	個人蔵
立体物	バス（紙製）	荒井良二	—	個人蔵
立体物	ホソミチくん　陶製飾り	荒井良二	—	個人蔵
立体物	ホソミチくん　時計	荒井良二	—	個人蔵
立体物	ホソミチくん　貝	荒井良二	—	個人蔵
立体物	額	荒井良二	—	個人蔵
冊子	自家製絵本　折本	荒井良二	—	個人蔵
冊子	自家製絵本「未来のぼくへ　for Arai Ryoji」	荒井良二	—	個人蔵
書画	ドローイング（わらばん紙）	荒井良二	—	個人蔵
書画	名画の模写	荒井良二	—	個人蔵
書簡	リンドグレーン賞賞状を模したポストカード	荒井良二	—	個人蔵
冊子	リンドグレーン賞授賞者紹介のパンフレット	スウェーデン・アーツ・カウンシル	—	個人蔵

種別	資料（作品）名	作者	初出・年代	所蔵
記念品	リンドグレーン賞の授賞式次第	スウェーデン・アーツ・カウンシル	—	個人蔵
パネル	パネル「アストリッド・リンドグレーン賞」	高志の国文学館	令和4年（2022）6月25日	—
「たいようオルガン」コーナー				
書画	原画「たいようオルガン」	荒井良二	平成19年（2007）	個人蔵
書画	東見本に描かれたラフ「たいようオルガン」	荒井良二	平成19年（2007）	個人蔵
パネル	「ゾウバス」	高志の国文学館	令和4年（2022）6月25日	—
パネル	「作品に寄せたメッセージ⑤たいようオルガン」（「vol・37 絵本作家荒井良二さん」「mi:te［ミーテ］」より）	高志の国文学館	令和4年（2022）6月25日	—
「あさになったので　まどをあけますよ」コーナー				
映像・動画	荒井良二インタビュー映像「「あさになったので　まどをあけますよ」「きょうはそらにまるいつき」を語る」	高志の国文学館	令和4年（2022）6月19日撮影	高志の国文学館
書画	原画「あさになったので　まどをあけますよ」	荒井良二	平成23年（2011）	個人蔵
書画	創作メモ　第1稿～第4稿	荒井良二	平成23年（2011）	個人蔵
書画	東見本に描かれたラフ　第1稿「あさになったので　まどをあけますよ」	荒井良二	平成23年（2011）	個人蔵
書画	東見本に描かれたラフ　第2稿「あさになったので　まどをあけますよ」	荒井良二	平成23年（2011）	個人蔵
パネル	「作品に寄せたメッセージ⑥あさになったので　まどをあけますよ」（「2011年の奥付に思いを込めて」「好書好日」より）	高志の国文学館	令和4年（2022）6月25日	—
書画	アームストロング青葉幼稚園　園児の描いた絵「あさになったので　まどをあけますよ」	アームストロング青葉幼稚園　もみじ組園児	令和4年（2022）6月25日	アームストロング青葉幼稚園　もみじ組園児
「きょうはそらにまるいつき」コーナー				
書画	原画「きょうはそらにまるいつき」	荒井良二	平成28年（2016）	個人蔵
書画	創作メモ　第1稿～第4稿	荒井良二	平成28年（2016）	個人蔵
書画	ラフ原画「きょうはそらにまるいつき」	荒井良二	平成28年（2016）	個人蔵
パネル	「作品に寄せたメッセージ⑦きょうはそらにまるいつき」（「あの日から」を生きる、すべての人へ。」「EhonNavi」より）	高志の国文学館	令和4年（2022）6月25日	—

種別	資料（作品）名	作者	初出・年代	所蔵
書画	アームストロング青葉幼稚園　園児の描いた絵「きょうはそらにまるいつき」	アームストロング青葉幼稚園もみじ組園児	令和4年（2022）6月25日	アームストロング青葉幼稚園　もみじ組園児
「こどもたちはまっている」コーナー				
映像・動画	荒井良二インタビュー映像「「こどもたちはまっている」を語る」	高志の国文学館	令和4年（2022）6月19日撮影	高志の国文学館
書画	原画「こどもたちはまっている」	荒井良二	令和2年（2020）	個人蔵
パネル	「作品に寄せたメッセージ⑧こどもたちはまっている」（「あとがき」『こどもたちはまっている』より）	高志の国文学館	令和4年（2022）6月25日	—
書画	ドローイング「〇〇子」	荒井良二	—	個人蔵
立体物	船・ラクダ・ネコ　置き物	—	—	個人蔵
パネル	「荒井良二のことば❾」（「荒井良二さん：子ども達に「いい日だった」と眠りについてほしい」「小学館キッズ絵本と絵本作家の情報サイト」より）	高志の国文学館	令和4年（2022）6月25日	—
パネル	「荒井良二のことば❿」（「300年後の人たちへ絵本に託すメッセージ」『男の隠れ家別冊　今だから読みたい絵本』より）	高志の国文学館	令和4年（2022）6月25日	—
立体物	荒井良二　手製の連続旗	荒井良二	—	個人蔵

□企画展示室平面図



1497
18165
15628
1041
11171
作品展示
作品紹介
作品パネル
作品によせたメッセージ
インタビュー映像
荒井良二のことば
荒井良二プロフィール
【導入】
【アトリエ】
【ユックリとジョジョに】
【きょうはそうにまるいつき】
【あさになったのでまどをあけます】
【こどもたちはまっている】
【たいようオルガン】
【はっぴいさん】
【きょうのぼくはどこまでだってはしれるよ】
【森の絵本】
【タイトルバナー】
森山直太朗MV『花鳥風月』
展示室入口
ごあいさつ
謝辞
ゲート
3000
600
来場者導線
イス
荒井良二 絵本展示

（3）開館10周年記念企画展
「没後50年　芥川賞作家　柏原兵三展」

小林加代子

柏原兵三（1933～1972）は、陸軍中将であった母方の祖父を描いた「徳山道助の帰郷」で第58回芥川賞を受賞し、「長い道」で東京を離れ富山県入善町に疎開した少年期の体験を描いた。ドイツ文学を学び、留学し、翻訳を手がけたことによって培われた筆致は、自らの体験と親族の人生に取材し、戦争を経て、人びとが失ったものと日々の暮らしを丹念に描き、日常にひそむひずみや奇妙さに目を凝らし、ユーモアに満ちた穏やかで強い生命力を感じさせる。

柏原兵三の没後50年、高志の国文学館開館10周年を機に開催した今回の企画展では、高志の国文学館開館記念展Ⅱ「富山が育んだ少年時代―小説・漫画・映画が描く疎開少年の長い道―」（2012年12月8日～2013年2月25日）をきっかけに、資料をお預かりして整理・保管の準備を進め、このたび受贈することとなった柏原兵三旧蔵資料5685点から、自筆原稿、書簡、日記、写真、絵画など、初公開資料を含む212点を展示し、個人蔵、当館蔵の絵画や書籍等とあわせて、計243点により、柏原兵三が生きた時代とその作品を紹介した。このたびのご寄贈について、令和4年（2022）9月24日に実施した本展開会式において、ご子息の柏原光太郎氏に対し、富山県副知事横田美香より紺綬褒章の伝達及び感謝状を贈呈した。

今回の企画展では、新収蔵資料の公開により、柏原兵三の作品の新たな魅力を紹介することを目指した。

第一章「親族を描く―立身出世の系譜」では、母方の祖父を描いた芥川賞受賞作「徳山道助の帰郷」、父を描こうとした伝記「ある男の生涯」、また、父の故郷である富山を舞台とした小説から「坐棺」、「浸蝕」、「祝言」を紹介した。「徳山道助の帰郷」の完成原稿は、現在、日本近代文学館蔵であり本展では展示紹介していないが、4種類の草稿と、「新潮」の担当編集者であった坂本忠雄による各草稿への自筆コメントを展示した。編集者とともに粘り強く作品を完成させていったことがうかがわれる。なお、展示した旧蔵資料には柏原兵三自身による朱書きのある掲載誌「新潮」1967年7月号がある。単行本『徳山道助の帰郷』（新潮社、1968年）ではこの箇所は修正されており、草稿や原稿とあわせて、創作の過程を知るうえで貴重な資料である。伝記「ある男の生涯」は、父・柏原兵太郎の生涯を描こうとした作品である。連載4回で柏原兵三の逝去により未完となった。この作品は、当初、「乱世の英雄」という題の小説として描こうとしていたものであった。本展では、そのことが知られる複数の草稿と、同名の随筆原稿「乱世の英雄」（発表時の題「われは天下公認の大闇屋」「文芸春秋」1970年1月号掲載）を展示した。草稿「父の故郷」は、「浸蝕」、「祝言」として発表された二作品の要素をあわせもつ内容で、もともと一つの作品として構想していたと推測される。「浸蝕」も複数の草稿を展示した。なお、「祝言」の原稿や草稿は今回受贈した旧蔵資料にはなく、「松沢家の祝言」と題されたものが入善町立図書館に所蔵されている。また、父方の祖母の死を描いた「坐棺」の草稿「柩」を展示した。寄贈された旧蔵資料を見る限りにおいて、柏原兵三は、作品によって複数の草稿を残している場合がある。全体像がつかめる程度の分量を書いて、また新たに草稿を一から書き直すことをしていたようであり、これらの草稿からは推敲の過程がうかがえる。なお、本展出品資料における自筆の既発表の作品のうち、印刷指示や校正書き入れがあるものは「原稿」、その他を「草稿」と表記した。

第二章「幼少期から青春時代の体験を描く―小説家志望の〝自画像〟」では、柏原兵三の生誕からドイツ留学までの足跡を、卒業論文や修士論文、大学・大学院時代に友人達と創刊した同人雑誌「運河」と「NEUE STIMME（ノイエ・シュティンメ）」、パスポート、留学時代の学生証などにより紹介した。あわせて、帰国後に発表した作品から、自らの幼少期と青春時代を描いた小説として、第56回芥川賞候補作「兎の結末」、芥川賞受賞後第一作「幼年時代」、疎開体験をもとに描いた「長い道」、日比谷高校時代を描いた「星ケ丘年代記」、高校三年生の夏休みの体験を描いた「短い夏」、父の存在に苦

悩する兄の姿を描いた「青い死の果実」を紹介した。中でも、「兎の結末」の原型とも言える高校1年生の時の創作「兎と少女二人」の原稿は、柏原兵三が「私の処女作」（「潮」１９７０年5月号）に「ホーム・ルームの成員の目に触れたという意味では、初めて発表した作品」と記した作品と推定されるもので、初公開作品として図録に全文の翻刻を掲載した。また、「長い道」は、既に中学3年生の時の創作「疎開の頃」や、同時期の作と推定される創作「敗滅」に、「長い道」に通じる内容が記されており、その後、同人雑誌「運河」第5号（１９５９年7月）に長編小説として執筆を開始してから10年をかけて、単行本『長い道』（講談社、１９６９年）が書き下ろしで発表されるまで構想を練り執筆し続けた作品であることを紹介した。あわせて、「長い道」を原作として藤子不二雄Ⓐが昭和53年（１９７８）から昭和54年（１９７９）にかけて連載した漫画「少年時代」の掲載誌「少年マガジン」やコミックス、篠田正浩監督による平成2年（１９９０）公開の映画「少年時代」のチラシ、チケット、ポスターなどを展示した。

第三章「留学体験を描く―さまよえる日本人」では、ドイツ留学時代の体験にもとづく小説として、「仮りの栖―ベルリン冬物語」、「小さな石の物語」、「ピクニック」、「ベルリン漂泊」を紹介した。ドイツ留学時代の記録は、「旅日記」、「滞独日記」と記された6冊の日記に残されており、小説の素材となった体験を複数確認することができる。友人知人からのドイツ国内郵便や、柏原兵三が日本の家族に宛てて送った国際郵便からも、後の創作に関わる出来事が知られる。また、帰国を控えた昭和40年（１９６５）8月4日付の絵画は、下宿先の一軒家を不透明水彩で描いたもので、この家の写真とあわせて展示した。この絵は、留学体験を描いた複数の小説に「ミーゲル家」として登場する主人公の下宿先のモデルとなった家を描いたものであり、絵の制作に関連する小説に「帰国前」がある。

第四章「随筆―時間を封じ込めた「もの」たち」では、随筆や翻訳の仕事を紹介した。複写原稿を展示した随筆「東京の公園」は、ドイツの観光・地誌雑誌「メーリアン」の「東京篇」に寄稿したもので、日本語原稿をドイツ語訳して掲載された。「運河」第12号（齋藤榮治先生・柏原兵三追悼号、１９８０年1月）に、坂井榮八郎によるドイツ語からの日本語訳が掲載されている。このことについて、同人の奈良正博は、日本語原稿が手に入らないこと、柏原兵三の幅広い活動を紹介するためにあえて重訳して紹介したことを記している。今回、旧蔵資料を整理・調査するなかで複写原稿が見つかったため本展において展示し、あわせて図録に翻刻を掲載した。

今回の企画展では、柏原兵三逝去の後、ご遺族が大切に保管されてきた作品・資料を、父祖の地であり作家を志す原点となったともいえる疎開体験の地、富山県にご寄贈いただくこととなり、受贈資料全体の５％に満たない点数ではあるが公開し、作家・柏原兵三の魅力を紹介した。資料全体の目録は、企画展の開幕にあわせて高志の国文学館ウェブサイトで公開を開始した高志の国文学館収蔵資料データベースでいつでも検索できる。また、原稿と絵画30点については、全頁の画像を常時公開している。なお、会期中限定ではあるが、企画展示室の展示ケース内に展示した原稿6点については、「ブックページャー」機能を導入し、ケースの隣で展示している原稿の全頁を画像で閲覧できる端末を設置した。また、展示室内で紹介した作品については、作品本文の一部を展示パネルで文章として紹介するとともに、モバイル端末アプリ「ポケット学芸員」により、文章と朗読音声を、会期中、自宅でも視聴できるよう、デジタル展示機能を活用した。

柏原兵三は、自らと親族のことを多く小説に描いた。現実の記録や書簡からは、小説にする際に、何を取り上げ、何を変更したが具体的にわかる場合が多々ある。また、論文や翻訳の仕事からは、作家・柏原兵三が身につけた文体や方法を考える手がかりを得ることができる。このことは、旧蔵資料全体の大きな特徴の一つである。さらに、複数の草稿、それに対する編集者のコメント、友人たちや同時代の文学者たちからの書簡は、創作の過程を知る上で、また、戦後文学史を考えるうえでも貴重である。

近代日本の立身出世を体現する存在でありながら、戦後、多くを失った父と祖父の姿を見つめつつ小説家への志を抱き、長い年月をかけて粘り強く小説を書き続け、その夢を実現した柏原兵三は、その自らの体験を小説に描いた。冷静に現実を受けとめ描いた作品は、38歳の若さで世を去って没後50年を経た現在においても、不安の時代にあってどのように生きていけばよいのかを考える道を開いてくれる魅力をたたえている。

本展の開催にあたり、格別のご高配を賜りました柏原光太郎氏をはじめ、一方ならぬお力添えを賜りました関係各位に改めて心より深謝申し上げます。

□主な展示物

種別	資料（作品）名	作者	年代	所蔵
第一章　親族を描く―立身出世の系譜				
原稿	乱世の英雄	柏原兵三	昭和44年（1969）頃	高志の国文学館
メモ・書類	小説「乱世の英雄」章立て構想メモ	柏原兵三		高志の国文学館
草稿	乱世の英雄（第四部第一章か）	柏原兵三		高志の国文学館
草稿	ある男の生涯	柏原兵三		高志の国文学館
草稿	柩（旧題「祖母」）	柏原兵三		高志の国文学館
草稿	父の故郷	柏原兵三		高志の国文学館
草稿	浸蝕（弟の結婚）	柏原兵三		高志の国文学館
草稿	徳山道助の帰郷（帰郷物語）	柏原兵三		高志の国文学館
草稿	徳山道助の帰郷	柏原兵三		高志の国文学館
メモ・書類	「徳山道助の帰郷」草稿へのコメント	坂本忠雄		高志の国文学館
書簡	柏原兵三宛封書	坂本忠雄	昭和42年（1967）3月7日付	高志の国文学館
絵画	『徳山道助の帰郷』（新潮社）扉絵原画	柏原兵三	昭和43年（1968）頃	個人蔵
書籍	坂本忠雄宛て献呈署名入り『徳山道助の帰郷』（新潮社）	柏原兵三	昭和43年（1968）頃	個人蔵
書簡	芥川賞受賞に際する祝詞への礼状	柏原兵三	昭和43年（1968）1月29日付	高志の国文学館
書簡	「運河」「形成」「NEUE STIMME」同人による芥川賞受賞記念パーティーの招待状	折原浩、神品芳夫、坂井栄八郎、滝内槙雄、西尾幹二、丸山匠、森川俊夫	昭和43年（1968）2月付	高志の国文学館
第二章　幼少期から青春時代の体験を描く―小説家志望の〝自画像〟				
日記・ノート類	大東亞戰争日記（2）（4）（5）（6）（7）	柏原兵三	昭和17年（1942）1月16日～昭和18年（1943）3月16日	高志の国文学館

種別	資料（作品）名	作者	年代	所蔵
日記・ノート類	大東亞戰争日記九号	柏原兵三	昭和18年（1943）3月17日～昭和19年（1944）1月29日	高志の国文学館
書簡	柏原兵三・兵四郎宛葉書	伊東兵次	昭和19年（1944）3月	高志の国文学館
書簡	柏原兵三宛葉書	伊東政喜	昭和19年（1944）3月29日付	高志の国文学館
書簡	兵三・兵四郎への手紙	母（柏原美代子）	昭和19年（1944）11月12日頃	高志の国文学館
書簡	子の歌（柏原兵三・兵四郎宛封書より）	柏原兵太郎	昭和19年（1944）12月7日付	高志の国文学館
書簡	柏原兵三・兵四郎宛封書	柏原兵一	昭和19年（1944）12月8日付	高志の国文学館
原稿類	作文「近頃思ふこと」	柏原兵三	昭和21年（1946）11月4日	高志の国文学館
原稿類	作文「戦に想ふ」	柏原兵三		高志の国文学館
日記・ノート類	星夜（1）	柏原兵三	昭和22年（1947）3月20日～10月13日	高志の国文学館
日記・ノート類	日記・随想第一号	柏原兵三	昭和23年（1948）3月31日～11月6日	高志の国文学館
日記・ノート類	青春断笑　第二号―附創作ノート―	柏原兵三	昭和23年（1948）11月22日～昭和24年（1949）3月24日	高志の国文学館
メモ・書類	自画像	柏原兵三画		高志の国文学館
原稿類	創作「敗滅」	柏原兵三		高志の国文学館
原稿類	創作「疎開の頃」	柏原兵三	昭和23年（1948）	高志の国文学館
絵画	おもちゃの犬	柏原兵三画	昭和22年（1947）頃	高志の国文学館
絵画	嵐の前	柏原兵三画	昭和23年（1948）5月4日	高志の国文学館
絵画	緑の庭	柏原兵三画	昭和23年（1948）6月6日	高志の国文学館

種別	資料（作品）名	作者	年代	所蔵
絵画	風景	柏原兵三画	昭和23年（1948）	高志の国文学館
絵画	子供の夢	柏原兵三画	昭和25年（1950）7月11日	高志の国文学館
絵画	二人の人形	柏原兵三画	昭和26年（1951）頃	高志の国文学館
原稿	兎と少女二人	柏原兵三	昭和24年（1949）	高志の国文学館
原稿	自転車	柏原兵三	昭和24年（1949）	高志の国文学館
切抜類	霧生明良　柏原兵三　二人展を見て（日比谷高新聞）	兒玉三郎	昭和26年（1951）10月25日	高志の国文学館
メモ・書類	自作の絵画のタイトルと説明を記したメモ	柏原兵三		高志の国文学館
日記・ノート類	兵三の日記	柏原兵三	昭和27年（1952）4月8日～昭和28年（1953）2月12日	高志の国文学館
日記・ノート類	日記　1953年8月24日	柏原兵三	昭和28年（1953）	高志の国文学館
日記・ノート類	日記	柏原兵三	昭和29年（1954）3月31日～昭和30年（1955）10月18日	高志の国文学館
日記・ノート類	読書記録	柏原兵三	昭和29年（1954）～昭和30年（1955）頃	高志の国文学館
原稿	猫	柏原兵三	昭和29年（1954）	高志の国文学館
パンフレット	第6回駒場祭	東京大学第六回駒場祭委員会編	昭和30年（1955）11月18日～20日	高志の国文学館
パンフレット	第六回駒場祭参加作品　ねずみ	柏原兵三作、奈良正博演出、東京大学教養学部昭和29年入学文化二類1A組	昭和30年（1955）11月19日上演	高志の国文学館
原稿	喜劇　ねずみ（一幕）	柏原兵三	昭和30年（1955）	高志の国文学館
台本	謄写版「笑劇　ねずみ（一幕）」	柏原兵三	昭和30年（1955）	高志の国文学館
切抜類	駒場祭見たまま（「教養学部報」第43号）		昭和30年（1955）11月28日	高志の国文学館
切抜類	座談会　駒場に於ける文学活動（「東京大学教養学部新聞」）	日高八郎（英語助教授）、稲葉清毅（文研）、大江健三郎（佛文科）、柏原兵三（独文科）、山谷馨（30L2）、編集局藝術部（司会）	昭和31年（1956）5月9日	高志の国文学館

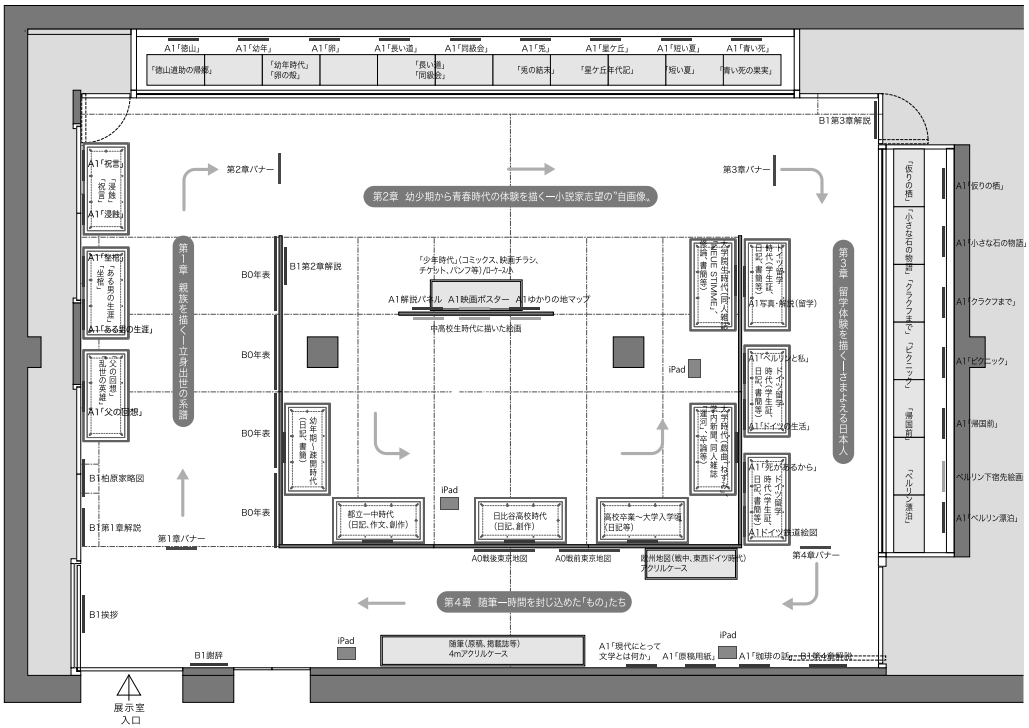
種別	資料（作品）名	作者	年代	所蔵
書簡	柏原兵三宛封書	大江健三郎	昭和32年（1957）8月9日消印	高志の国文学館
書簡	柏原兵三宛年賀状	大江健三郎	昭和33年（1958）1月1日消印	高志の国文学館
卒業論文	Über die „Bekenntnisse einer schönen Seele" in Goethes „Wilhelm Meisters Lehrjahren　ゲーテ「ヴィルヘルム・マイスターの修業時代」に於ける「美しき魂の告白」について	柏原兵三	昭和33年（1958）	高志の国文学館
卒業論文草稿	ゲーテ「ヴィルヘルム・マイスターの修業時代」に於ける「美しき魂の告白」について	柏原兵三	昭和33年（1958）頃	高志の国文学館
原稿	長い道（第1章）　運河版	柏原兵三	昭和34年（1959）頃	高志の国文学館
書簡	柏原兵三宛封書	平沼高明	昭和34年（1959）8月23日付	高志の国文学館
書簡	平沼高明宛封書	柏原兵三	昭和34年（1959）8月25日付	高志の国文学館
修士論文梗概	Der Zauberberg als ein Bildungsroman —Das Problem des Bildungsromans in der Gegenwart—　教養小説としての魔の山　—現代に於ける教養小説の問題—	柏原兵三	昭和36年（1961）	高志の国文学館
修士論文草稿	DER ZAUBERBERG ALS EIN BILDUNGSROMAN —DAS PROBLEM DES BILDUNGSROMANS IN DER GEGENWART—	柏原兵三	昭和36年（1961）頃	高志の国文学館
書簡	結婚報告の挨拶状	柏原兵三・悦子	昭和36年（1961）4月	高志の国文学館
文書	昭和38年度ドイツ留学生決定の通知書	文部省	昭和38年（1963）7月18日発行	高志の国文学館
パスポート	柏原兵三　日本国旅券（公用）	外務省	昭和38年（1963）7月29日発行	高志の国文学館
書簡	ヴーテノー講師と「NEUE STIMME」同人たちから柏原兵三に宛てた留学出発を祝う電報	R・Rヴーテノー、松本道介、小川一枝、清水豊明、高辻知義	昭和38年（1963）8月25日	高志の国文学館

種別	資料（作品）名	作者	年代	所蔵
文書	東京からパート・ライヒェンハルまでの旅行日程表	日本交通公社	昭和38年（1963）	高志の国文学館
身分証	ゲーテ・インスティトゥート身分証		昭和38年（1963）	高志の国文学館
書簡	柏原悦子宛封書（国際郵便）	柏原兵三	昭和38年（1963）9月2日付	高志の国文学館
書簡	柏原悦子宛封書（国際郵便）	柏原兵三	昭和38年（1963）9月10日消印	高志の国文学館
日記・ノート類	旅日記1	柏原兵三	昭和38年（1963）8月26日～10月27日、昭和40年（1965）3月12日～20日	高志の国文学館
学生手帳	ベルリン自由大学学生手帳		昭和38年（1963）	高志の国文学館
書簡	柏原悦子宛封書（国際郵便）	柏原兵三	昭和38年（1963）11月6日付	高志の国文学館
日記・ノート類	旅日記2	柏原兵三	昭和38年（1963）12月17日～3月18日	高志の国文学館
書簡	柏原美代子宛便箋（国際郵便）	柏原兵三	昭和39年（1964）2月13日付	高志の国文学館
書簡	柏原悦子・光太郎宛便箋（国際郵便）	柏原兵三	昭和39年（1964）4月5日付	高志の国文学館
書簡	柏原兵五郎・睦子宛絵葉書（国際郵便）	柏原兵三	昭和39年（1964）6月6日付	高志の国文学館
日記・ノート類	旅日記3	柏原兵三	昭和39年（1964）5月17日～6月16日	高志の国文学館
日記・ノート類	旅日記4	柏原兵三	昭和39年（1964）5月3日～10月13日	高志の国文学館
日記・ノート類	旅日記5	柏原兵三	昭和39年（1964）10月29日～12月11日	高志の国文学館
日記・ノート類	滞独日記6	柏原兵三	昭和40年（1965）1月30日～8月11日	高志の国文学館
草稿	幼年時代	柏原兵三		高志の国文学館
原稿	長い道（第2章）運河版	柏原兵三	昭和35年（1960）頃	高志の国文学館
原稿	長い道（第3章）運河版	柏原兵三	昭和36年（1961）頃	高志の国文学館
原稿	長い道（第4章）運河版	柏原兵三	昭和38年（1963）頃	高志の国文学館
原稿	長い道（第一章）	柏原兵三	昭和44年（1969）頃	高志の国文学館
原稿	長い道（第一章～第二章）	柏原兵三	昭和44年（1969）頃	高志の国文学館
原稿	長い道（第六章～第七章）	柏原兵三	昭和44年（1969）頃	高志の国文学館

種別	資料（作品）名	作者	年代	所蔵
書簡	千駄谷小学校の先生から柏原兵三に宛てた手紙		昭和19年（1944）3月24日付	高志の国文学館
書簡	上原国民学校で級長だった少年から柏原兵三に宛てた手紙		昭和20年（1945）11月12日付	高志の国文学館
絵画	『長い道』（講談社）表紙原画	柏原兵三画	昭和44年（1969）頃	高志の国文学館
ポスター・チラシ等	映画「少年時代」チラシ、パンフレット、チケット半券、ポスター	「少年時代」製作委員会	平成2年（1990）	高志の国文学館
原稿	兎の結末	柏原兵三	昭和41年（1966）頃	高志の国文学館
草稿	兎の結末（第一稿）	柏原兵三		高志の国文学館
草稿	勲章（兎の終末の一部）	柏原兵三		高志の国文学館
切抜類	私の処女作 『兎の結末』（「潮」）	柏原兵三	昭和45年（1970）5月号	高志の国文学館
原稿	星ケ丘年代記（未定稿）	柏原兵三		高志の国文学館
草稿	蛙の時代	柏原兵三		高志の国文学館
書簡	柏原兵三宛誓書	藤井宏昭	昭和22年（1947）11月10日付	高志の国文学館
切抜類	芥川賞まで（「読売新聞」）	柏原兵三	昭和43年（1968）2月11日	高志の国文学館
書簡	柏原兵三宛封書	江藤淳	昭和43年（1968）5月3日付	高志の国文学館
切抜類	積重なった文士の疲労　柏原兵三氏のかかえた〝魔〟（文芸時評）（「毎日新聞」）	江藤淳	昭和47年（1972）2月24日夕刊	高志の国文学館
草稿	ある夏の思い出　短い夏	柏原兵三		高志の国文学館
原稿	青い死の果実	柏原兵三	昭和44年（1969）頃	高志の国文学館
切抜類	〝臆面のない〟柏原氏（文芸時評）（「読売新聞」）	佐伯彰一	昭和44年6月26日夕刊	高志の国文学館
第三章　留学体験を描く―さまよえる日本人				
原稿	仮りの栖　第八章	柏原兵三	昭和44年（1969）頃	高志の国文学館
書簡	柏原兵三宛封書（ドイツ国内郵便）	立川洋三	昭和38年9月25日消印	高志の国文学館
書簡	柏原兵三宛葉書（ドイツ国内郵便）	立川洋三	昭和38年9月15日消印	高志の国文学館
書簡	柏原兵三宛葉書（ドイツ国内郵便）	立川洋三	昭和38年10月7日消印	高志の国文学館
書簡	柏原美代子・家族一同宛絵葉書（国際郵便）	柏原兵三	昭和38年10月14日消印	高志の国文学館

種別	資料（作品）名	作者	年代	所蔵
切抜類	飾らずに心情を形象化して　柏原兵三氏を悼む（「日本読書新聞」）	立川洋三	昭和47年（1972）2月23日	高志の国文学館
絵画	ビールのジョッキ敷きに描かれていた「BerlinerKindl」の子どもの絵	柏原兵三画		高志の国文学館
メモ・書類	構想メモ「ミーゲル家の物語」	柏原兵三	昭和46年（1971）頃	高志の国文学館
原稿	小さな石の物語	柏原兵三	昭和43年（1968）頃	高志の国文学館
校正紙	小さな石の物語（「新潮」）	柏原兵三	昭和43年8月号	高志の国文学館
原稿	「新潮」との出逢い	柏原兵三	昭和46年（1971）頃	高志の国文学館
原稿	ピクニック	柏原兵三	昭和42年（1967）頃	高志の国文学館
草稿	ポツダム旅行　ピクニック	柏原兵三		高志の国文学館
絵画	ドイツ留学時代の下宿先を描いた絵画	柏原兵三画	昭和40年（1965）8月4日	高志の国文学館
愛用品	柏原兵三　画材道具			高志の国文学館
原稿	ベルリン漂泊（第一章）	柏原兵三	昭和46年（1971）頃	高志の国文学館
原稿	ベルリン漂泊（最終回）	柏原兵三	昭和46年（1971）頃	高志の国文学館
第四章　随筆―時間を封じ込めた「もの」たち				
絵画	街灯のイラスト	柏原兵三画		高志の国文学館
草稿	コーヒーの話	柏原兵三		高志の国文学館
切抜類	随筆「珈琲の話」（「郵政」）	柏原兵三	昭和43年4月号	高志の国文学館
切抜類	随筆「原稿用紙」（「信濃毎日新聞」）	柏原兵三	昭和46年10月26日	高志の国文学館
切抜類	随筆「立ち机と坐り机」（「3の4」）	柏原兵三	昭和45年8月	高志の国文学館
切抜類	随筆「ドイツの生活あれこれ」（「初級ドイツ語」）	柏原兵三	昭和43年10月号	高志の国文学館
切抜類	随筆「ドイツ文学と私」（「高知新聞」）	柏原兵三	昭和43年2月4日	高志の国文学館
草稿	現代にとって文学とは何か	柏原兵三		高志の国文学館
切抜類	随筆「死があるから生が尊い」（「中日新聞」）	柏原兵三	昭和46年11月28日	高志の国文学館
切抜類	随筆「変化のテンポ」（「日本経済新聞」）	柏原兵三	昭和47年2月14日	高志の国文学館
複写原稿	東京の公園	柏原兵三	昭和46年（1971）頃	高志の国文学館

□企画展示室平面図



（4）開館10周年記念企画展
「没後50年　川端康成 展―愛を乞う魂」

亀島麻衣子

一九七二年四月十六日夜、逗子マリーナにある仕事部屋で命を絶った文豪、川端康成―その死から五十年がたった。

県立神奈川近代文学館では川端康成の没後五十年を機に、企画展「没後50年 川端康成展 虹をつむぐ人」を開催した。日本の美を描いた作家という印象の強い川端が、初期のころは〈新感覚派〉の一員として先鋭的な作品で注目され、以後も常に新しい芸術表現を試み、幅広いジャンルの作品を手掛けていることから、編集委員を務めた荻野アンナ氏は、〈川端文学〉の多様性、多面性に焦点をあてた。また、一文学者としての創作活動に留まらず、さまざまな文学団体で中心的役割を担い、多くの若き才能を支援した〈人間・川端〉の姿を紹介した。

荻野氏は編集意図を記したエッセイで「虹は七色を含んで濁らず、川端作品はその多様性にもかかわらず、統一感を失わない。全作品に共通しているのは、作者のきわめて独特な世界観である。」とし、川端作品の多くに川端の根源をなす要素が底流していることを示唆した。そこで本展では、県立神奈川近代文学館の「没後50年 川端康成展 虹をつむぐ人」をもとに、〈川端文学〉を形成した〈人間・川端〉の根源をさらに掘り下げることを試みた。

川端は、十四歳で唯一の肉親であった祖父とも死別し孤児となった。また、戦争末期から敗戦間もない時期にかけて恩人や友人たちと次々に死別した。こうした癒しがたい川端のさびしさが、孤独を乗り越えようと人とのつながりを追い求める各作品の登場人物にも映しだされていると捉え、川端の根源に「愛を求める孤独な魂」があると考えた。それを本展の副題に反映させて再構成し、令和四年十二月二十四日から令和五年二月二十七日にかけて開館10周年記念企画展「没後50年 川端康成 展―愛を乞う魂」を開催した。

本展は、大きく二つのエリアで構成し、前半を「〈人間・川端〉孤独に生きる」、後半を「〈川端文学〉愛を見つめる」と題した。

前半エリア「〈人間・川端〉孤独に生きる」では、早くに天涯孤独の身となり、肉親喪失の体験と孤児意識を作品に紡いだ川端の、愛を求める孤独な魂の経歴を追った。ここでは【天涯孤独の少年】【一高・帝大時代】【新感覚派の頃】【やさしいまなざし】と小テーマに分けて展示をした。

【天涯孤独の少年】では、両親亡き後、盲目の祖父と二人で暮らし、今でいうヤングケアラーの生活を送っていた川端に関する資料を展示した。川端文学の原点ともいわれる祖父の看病日記「十六歳の日記」のほか、父、川端栄吉の表札も展示した。孫である川端あかり氏から「祖父は孤児となり、大人になってからも何度も引っ越しをしているのに、この表札が今も残されているということに祖父の思いを感じる。」と聞き、川端のさびしさに触れたように感じた。また、祖父と死別し孤児となった川端の中学時代の資料と、中学校の寄宿舎での体験を綴った小説「少年」も紹介した。

【一高・帝大時代】では、第一高等学校や帝国大学の学生だった頃に親交があった人々を紹介し、恩人である菊池寛や婚約者だった伊藤初代に関する資料を展示した。伊藤初代については、ある「非常」を理由に婚約の解消を求める川端宛の書簡のほか、二〇二二年春に新発見が伝えられた「篝火」草稿を展示し、川端の心を揺るがした恋愛事件がその後の川端作品に大きな影響を及ぼしていることを紹介した。

【新感覚派の頃】では、菊池寛の紹介で出会い、のちに無二の友人となった横光利一に関する資料を展示した。ともに雑誌「文芸時代」を創刊し「新感覚派」と呼ばれた頃から、かたい絆で結ばれた横光と川端がやり取りした多くの書簡から五通を展示した。そのうちの二通は、「篝火」草稿と同じく昨年の春に新発見が伝えられたものである。また、川端が横光の葬儀で読んだ弔辞を展示し、川端が戦後社会のなかで急速に失われつつある日本古来の美をその筆にとどめる決意をしたことを紹介した。

【やさしいまなざし】では、多くの新しい才能を見出した川端を紹介し、若い世代とのつながりも大切にした川端の一面に光を当てている。川端に才能を見出されたひとりである北條民雄は、ハンセン病を患いながらも文学を

志した。川端は親身になって北條を励まし、北條の作品を世に出した。北條と川端の往復書簡三通をタブレットで展示し、北條が過ごしたハンセン病患者の療養所であった全生病院（現・多磨全生園）の当時の様子がうかがえる資料写真も展示した。また、川端は三島由紀夫が戦後の文壇で活躍する足がかりをつくった。三島との写真や書簡などを展示し、川端が年少の無二の師友として三島と結んだ交誼の一端を紹介した。川端は、芥川賞の銓衡委員も務めており、太宰治が第三回芥川賞の授与を川端に懇願をした書簡の展示は観客の目を引いた。川端が太宰没後、彼の英訳刊行に尽力していたことを合わせて紹介した。

後半エリア「〈川端文学〉愛を見つめる」では、孤独ゆえに愛を求め、見つめた川端が紡ぐ多面的な愛の世界を、代表作とともにたどった。

執筆活動を通して、人間の根源をなす「愛」を鋭く見つめた川端は、さまざまな愛の世界を〈川端文学〉として発表した。ここでは【さまざまな愛のかたち】【愛を知りたい不良少女】【浄化される青年の心】【からめとられる大人の恋】【哀愁と美と】【人間の根源を見つめて】と小テーマに分け、代表作に紡がれた「愛」のかたちを解説するパネルを展示した。

【さまざまな愛のかたち】では、多彩で多様な作品の中にさまざまな愛が題材として描かれている短編集『掌の小説』を取り上げた。

【愛を知りたい不良少女】では小説「浅草紅団」を取り上げ、「紅」が主人公・弓子の無くせずにいる「女になりたい心」を暗示し、復興著しい浅草の喧騒の中で、恋をうらやみ、愛を知りたいと渇望する少女のさびしさを描いているという捉えを紹介した。

【浄化される青年の心】では小説「伊豆の踊子」を取り上げ、「孤児根性で歪んでいる」自分自身から切り離されたいという願いをもっている「私」が踊子からの無垢な好意に触れ、ありのままの自分自身を受け入れることができるようになった経緯を説明した。

【からめとられる大人の恋】では小説「雪国」を取り上げ、島村も駒子もお互いあけすけにふるまっているようで最後まで踏み込ませることなく、大人の恋にからめとられている様子が描かれているという捉えを紹介した。また、昨年の春に新発見が伝えられた「雪国」創作メモを展示し、一九三五年に雑誌の連載が始まってから一九七一年に定本「雪国」が刊行されるまでの間に多くの構想があったことを紹介した。

【哀愁と美と】では、小説「千羽鶴」「山の音」「古都」を取り上げた。「千羽鶴」については、人とのつながりを追い求める登場人物たちが、心のつながりは果たすことができないという哀愁を感じさせる作品として捉えたことを伝えた。

【人間の根源を見つめて】では、小説「虹いくたび」「みずうみ」「眠れる美女」「片腕」を取り上げた。〈魔界〉という戦後の川端作品の重要なキーワードを紹介し、川端が倫理道徳を超越した〈魔界〉の住人たちを主人公に耽美夢幻の空間を創出し、その中でこそ表現しうる人間の根源にある「愛」を鋭く描き出していることを伝えた。そして、いずれの作品にも愛を乞う魂のさびしさが感じられることを伝えた。

後半エリアで取り上げた作品については、荻野アンナ氏による解説パネルも合わせて展示し、多面的な捉えが可能な〈川端文学〉の魅力を紹介した。

この二つのエリアのほかに、「川端の書斎」コーナーを設置し、川端の遺品を展示した。また、「国際作家として」と題したコーナーでは、ノーベル文学賞の賞状とメダルなどノーベル文学賞に関わる資料を展示した。「映画化された川端文学」コーナーでは、当時のポスターやスチル写真、マスコミ向けに配布されたプレスシートなど貴重な資料を展示した。その時代を代表するスターが出演する映画が多く、展示に華やかさが加わった。川端自身が制作に関わった映画作品「狂った一頁」の資料も展示し、川端の先鋭的な感性を表現した映像作品として紹介した。

企画展示室外では、エントランスにて、県立富山いずみ高等学校書道部による書道パフォーマンス作品を展示した。高校生が「雪国」を読み、書きあげた作品は、迫力の中に美しさが感じられた。また、映画「伊豆の踊子」の予告編の上映を行い、関連イベントでは本編の上映会も開催した。

関連イベントはほかに、荻野アンナ氏の記念講演「川端康成の小説万華鏡」、大学生がおすすめの川端作品について熱く語る「白熱読書」、大江健三郎との比較から読み解く対談「美しい日本の私・あいまいな日本の私」も実施した。

孤独を抱えた川端の幻の分身たちの哀しくも美しい物語を取り上げた本展で、愛を求める川端の魂のさけびを感じていただければ幸いである。文学の力を信じて描き続けた川端康成の名作の数々が、次の世代に受け継がれ、生きる糧となることを願っている。

□主な展示物

種別	資料（作品）名	作者	年代	所蔵
エントランス（ロビー）				
映像	映画「伊豆の踊子」予告編	日活	昭和38年（1963）	日活
書画	書道パフォーマンス作品「雪国」	県立富山いずみ高等学校書道部	令和4年（2022）	県立富山いずみ高等学校
（人間・川端）孤独に生きる				
雑誌	「文藝春秋」	川端康成	大正14年（1925）8月	神奈川近代文学館
写真	茨木中学校入学当時		明治45年（1912）	日本近代文学館
写真	父・栄吉（1869～1901）			川端康成記念会
写真	両親死後、祖父母と暮らした宿久庄の家			茨木市立川端康成文学館
自筆資料	当用日記	川端康成	大正3年（1914）	川端康成記念会
自筆資料	生徒日誌	川端康成	大正5年（1916）	川端康成記念会
立体物	表札「医 川端栄吉」			川端康成記念会
写真	茨木中学校5年乙組		大正5年（1916）	日本近代文学館
原稿	「H中尉に」	川端康成		川端康成記念会
原稿	「少年」	川端康成		川端康成記念会
自筆資料	ノート二	川端康成	大正5年（1916）	川端康成記念会
書画	自画像	川端康成	大正5年（1916）	川端康成記念会
写真	南部修太郎と		昭和34年（1959）12月	日本近代文学館
雑誌	第6次「新思潮」創刊号		大正12年（1923）2月	日本近代文学館
写真	菊池寛（1888～1948）		大正12年（1923）ころ	日本近代文学館
雑誌	「新思潮」2号		大正12年（1923）4月	日本近代文学館
雑誌	「文藝春秋」創刊号		大正12年（1923）1月	神奈川近代文学館
書簡	川端あて	菊池寛	大正12年（1923）	川端康成記念会
写真	伊藤初代（1906～1951）		大正8年（1919）ころ	桜井靖郎氏

種別	資料（作品）名	作者	年代	所蔵
写真	伊藤初代、三明永無と	瀬古写真館	大正10年（1921）	桜井靖郎氏、瀬古写真株式会社
自筆資料	日記（Pocket Diary）	川端康成	大正9年（1920）	川端康成記念会
書簡	川端あて	伊藤初代	大正10年（1921）	川端康成記念会
雑誌	「新思潮」		大正12年（1923）7月	神奈川近代文学館
草稿	「篝火」	川端康成		川端康成記念会
雑誌	「文芸時代」創刊号		大正13年（1924）10月	神奈川近代文学館
雑誌	「文芸時代」		大正14年（1925）6月	神奈川近代文学館
雑誌	「文芸時代」		大正14年（1925）11月	神奈川近代文学館
雑誌	「文芸時代」		大正15年（1926）7月	神奈川近代文学館
雑誌	「文芸時代」		大正15年（1926）10月	神奈川近代文学館
写真	横光利一（1898～1947）			神奈川近代文学館
写真	横光利一文学碑除幕式で		昭和34年（1959）12月	神奈川近代文学館
写真	「文芸時代」同人と		昭和6年（1931）ころ	日本近代文学館
写真	横光利一の告別式で弔辞を読む		昭和23年（1948）	日本近代文学館
自筆資料	横光利一への弔辞	川端康成	昭和23年（1948）	神奈川近代文学館
書簡	川端あてはがき	横光利一	大正11年（1922）	川端康成記念会
書簡	川端あて	横光利一	大正13年（1924）	川端康成記念会
書簡	川端あて	横光利一	大正13年（1924）	川端康成記念会
書簡	川端あて	横光利一	昭和19年（1944）	川端康成記念会
書簡	川端あて	横光利一	昭和22年（1947）	川端康成記念会
写真	全生病院（現・多磨全生園）収容門		大正期	国立ハンセン病資料館
写真	全生病院（現・多磨全生園）患者の寮舎		昭和3年（1928）年ころ	国立ハンセン病資料館

種別	資料（作品）名	作者	年代	所蔵
写真	全生病院（現・多磨全生園）患者作業		年代不明	国立ハンセン病資料館
図書	『いのちの初夜』	北條民雄	昭和11年（1936）	神奈川近代文学館
複製資料	北條民雄の肖像画	東條耿一		日本近代文学館
原稿	「癩を病む青年達」	北條民雄		川端康成記念会
書簡	北條民雄あて	川端康成	昭和10年（1935）	日本近代文学館
書簡	川端あて	北條民雄	昭和10年（1935）	日本近代文学館
書簡	北條民雄あて	川端康成	昭和10年（1935）	日本近代文学館
雑誌	「国文学　解釈と教材の研究」		昭和45年（1970）2月号	神奈川近代文学館
写真	川端邸のパーティーで		昭和26年（1951）ころ	日本近代文学館
写真	芥川賞選考会で三島由紀夫と		昭和41年（1966）7月	文藝春秋
写真	三島が自決した市ヶ谷駐屯地で		昭和45年（1970）	毎日新聞社
書簡	三島由紀夫あて	川端康成	昭和20年（1945）	川端康成記念会
書簡	三島由紀夫あて	川端康成	昭和31年（1956）	川端康成記念会
書簡	川端あて　芥川賞懇請	太宰治	昭和11年（1936）	川端康成記念会
川端の書斎				
写真	長谷の自宅書斎で			日本近代文学館
写真	ロダン作「女の手」に見入る		昭和24年（1949）ころ	日本近代文学館
写真	仏像を前に		昭和25年（1950）ころ	日本近代文学館
立体物	「女の手」	ロダン		川端康成記念会
立体物	遺品（筆立て、毛筆、インク壺、文鎮、文箱、未使用原稿用紙）			鎌倉文学館
〈川端文学〉愛を見つめる				
雑誌	「文芸時代」		大正13年（1924）12月	神奈川近代文学館
図書	『感情装飾』		大正15年（1926）	神奈川近代文学館
写真	関東大震災			神奈川近代文学館
複製資料	「文学時代」掲載記事		昭和5年（1930）12月	神奈川近代文学館
写真	大森馬込の自宅付近で			日本近代文学館
写真	秀子夫人、梅園龍子と			日本近代文学館
書簡	添田唖蝉坊あて		昭和5年（1930）	神奈川近代文学館
雑誌	「文学時代」		昭和4年（1929）11月	神奈川近代文学館
図書	『浅草紅団』	川端康成	昭和5年（1930）	神奈川近代文学館

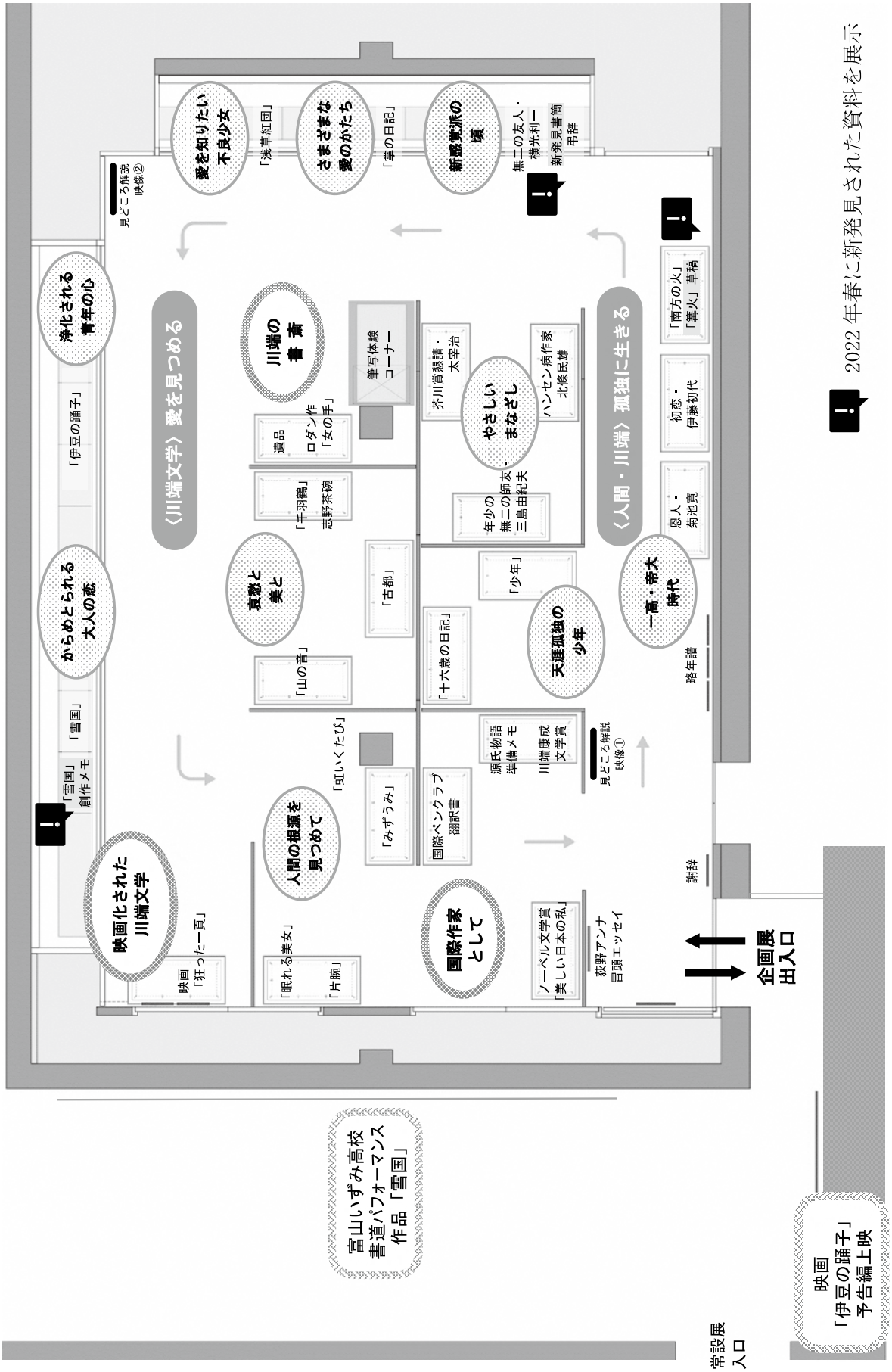
種別	資料（作品）名	作者	年代	所蔵
図書	『モダン・TOKIO・円舞曲　新興藝術派十二人』	川端康成、堀辰雄ほか	昭和5年（1930）	神奈川近代文学館
印刷物	「浅草紅団」新聞切抜（東京朝日新聞夕刊）2点	川端康成、太田三郎	昭和4年（1929）	日本近代文学館
草稿	「浅草祭」	川端康成		川端康成記念会
印刷物	カジノ・フォーリー関連　4点			川端康成記念会
写真	一高中寮三番の級友と			日本近代文学館
写真	湯本館の人々と			日本近代文学館
雑誌	「文芸時代」		大正15年（1926）1月	神奈川近代文学館
図書	『伊豆の踊子』	川端康成	1927年（昭和2）	神奈川近代文学館
原稿	「温泉宿」	川端康成		日本近代文学館
原稿	「春景色」	川端康成		川端康成記念会
書簡	川端あて年賀はがき	時田薫	大正7年（1918）	川端康成記念会
書簡	川端あてはがき	時田薫	大正8年（1919）	川端康成記念会
書簡	川端あてはがき	時田薫	大正8年（1919）	川端康成記念会
書簡	川端あて	尾崎士郎	大正15年（1926）	川端康成記念会
書簡	川端あて	梶井基次郎	昭和2年（1927）	川端康成記念会
図書	『抒情哀話 伊豆の踊子』	川端康成	昭和8年（1933）	川端康成記念会
図書	限定署名本『伊豆の踊子』	川端康成	昭和7年（1932）	鎌倉文学館
写真	高半旅館／「かすみの間」表札	雪國の宿 高半	昭和40年（1965）代	神奈川近代文学館
写真	雪の越後湯沢		昭和30年（1955）ころ	湯沢町
写真	サイデンステッカーと		昭和32年（1957）	湯沢町
雑誌	「文芸春秋」		昭和10年（1935）1月	神奈川近代文学館
図書	『雪国』	川端康成	昭和12年（1937）	神奈川近代文学館
図書	『北越雪譜』	鈴木牧之編撰、京山人百樹刪定、岡田武松校訂	昭和11年（1936）	神奈川近代文学館
図書	完結版『雪国』	川端康成	昭和23年（1948）	神奈川近代文学館
図書	定本『雪国』	川端康成	昭和46年（1971）	神奈川近代文学館
原稿	「雪国」	川端康成		日本近代文学館
原稿	「雪国抄」	川端康成		川端康成記念会
自筆資料	「雪国」創作メモ	川端康成		川端康成記念会
書簡	川端秀子あて	川端康成	昭和9年（1934）	川端康成記念会

種別	資料（作品）名	作者	年代	所蔵
写真	茶器を手に		昭和25年（1950）	日本近代文学館
原稿	「千羽鶴」（第1回）	川端康成		神奈川近代文学館
図書	『千羽鶴』	川端康成	昭和27年（1952）	神奈川近代文学館
自筆資料	「波千鳥」創作ノート			川端康成記念会
立体物	志野茶碗	加藤唐九郎		川端康成記念会
原稿	「千羽鶴」	川端康成		川端康成記念会
写真	人形師・井尻茂子と		昭和36年（1961）	中央公論新社
印刷物	「古都」新聞切抜（朝日新聞）	川端康成	昭和36年（1961）	神奈川近代文学館
図書	『古都』	川端康成	昭和37年（1962）	神奈川近代文学館
書簡	サイデンステッカーあて		昭和35年（1960）	日本近代文学館
写真	鎌倉・長谷の自宅蔵の前で		昭和26年（1951）ころ	日本近代文学館
写真	現在の川端邸	今井卓		川端康成記念会
図書	限定版『山の音』	川端康成	昭和29年（1954）	神奈川近代文学館
原稿	「山の音　第1章」	川端康成		日本近代文学館
原稿	「山の音」	川端康成		川端康成記念会
自筆資料	創作ノート	川端康成	昭和27年（1952）	川端康成記念会
原稿	「『人間のなかのひととちがった魔族』―川端康成「みづうみ」―」	大江健三郎		神奈川近代文学館寄託
図書	『みづうみ』	川端康成		神奈川近代文学館
自筆資料	「みづうみ」創作メモ	川端康成		川端康成記念会
原稿	「眠れる美女」	川端康成		川端康成記念会
雑誌	「新潮」		昭和35年（1960）1月	神奈川近代文学館
雑誌	「新潮」		昭和38年（1963）8月	神奈川近代文学館
図書	『眠れる美女』	川端康成	昭和36年（1961）	神奈川近代文学館
図書	『片腕』	川端康成	昭和40年（1965）	神奈川近代文学館
映画化された川端文学				
雑誌	「映画時代」創刊号	川端康成	大正15年（1926）7月	神奈川近代文学館
雑誌	「今日の文学」		昭和8年（1933）4月	神奈川近代文学館
写真	「狂った一頁」撮影時の記念写真		大正15年（1926）	国立映画アーカイブ
写真	映画「狂った一頁」	新感覚派映画聯盟、ナショナルアートフィルム社	大正15年（1926）	国立映画アーカイブ

種別	資料（作品）名	作者	年代	所蔵
写真	田中絹代、吉永小百合と		昭和40年（1965）	文藝春秋
写真	映画「伊豆の踊子」吉永小百合と			毎日フォト（新潮社）
写真	映画「恋の花咲く　伊豆の踊子」田中絹代	松竹	昭和8年（1933）	川喜多記念映画文化財団
写真	映画「恋の花咲く　伊豆の踊子」田中絹代と大日方傳	松竹	昭和8年（1933）	川喜多記念映画文化財団
写真	映画「伊豆の踊子」主演の内藤洋子と		昭和42年（1967）か	川喜多記念映画文化財団
写真	映画「雪国」豊田四郎監督と		昭和32年（1957）	川喜多記念映画文化財団
写真	映画「雪国」ロケ風景（蓑帽子の行列）		昭和32年（1957）	にいがた地域映像アーカイブ・データベース
写真	映画「雪国」ロケ風景（八千草薫ら）		昭和32年（1957）	にいがた地域映像アーカイブ・データベース
印刷物	映画「伊豆の踊子」ポスター（スピード版）	松竹	昭和35年（1960	川喜多記念映画文化財団
印刷物	映画「伊豆の踊子」ポスター（スピード版）	東宝	昭和42年（1967）	川喜多記念映画文化財団
印刷物	映画「伊豆の踊子」ポスター（B2版）	東宝／ホリプロ	昭和49年（1974）	川喜多記念映画文化財団
印刷物	映画「雪国」ポスター（スピード版）	東宝	昭和32年（1957）	川喜多記念映画文化財団
印刷物	映画「雪国」ポスター（スピード版）	松竹	昭和40年（1965）	川喜多記念映画文化財団
印刷物	映画「雪国」プレスシート	東宝	昭和32年（1957）	川喜多記念映画文化財団
印刷物	映画「古都」ポスター（スピード版）	松竹	昭和38年（1963）	川喜多記念映画文化財団
印刷物	映画「古都」ポスター（B2版）	ホリプロ	昭和55年（1980）	川喜多記念映画文化財団
印刷物	映画「古都」プレスシート	松竹	昭和38年（1963）	川喜多記念映画文化財団
印刷物	映画「山の音」プレスシート	東宝	昭和29年（1954）	川喜多記念映画文化財団
国際作家として				
写真	第29回国際ペンクラブ大会で		昭和32年（1957）	毎日新聞社
雑誌	「人間」		昭和24年（1949）10月	神奈川近代文学館

種別	資料（作品）名	作者	年代	所蔵
草稿	「国際ペン東京大会開会の辞」	川端康成		川端康成記念会
書簡	川端秀子、政子あて	川端康成	昭和32年（1957）	川端康成記念会
図書	〝Snow country〟	サイデンステッカー訳	1956年	川端康成記念会
自筆資料	第一回川端康成文学賞授賞式挨拶メモ	井上靖	昭和49年（1974）	神奈川近代文学館
自筆資料	「源氏物語」現代語訳準備メモ	川端康成		川端康成記念会
写真	肖像　深夜書斎で（ノーベル文学賞当夜）		昭和43年（1968）	毎日新聞社
写真	ノーベル賞受賞記念講演で		昭和43年（1968）	毎日新聞社
写真	ノーベル賞受賞式で訪れたスウェーデンで		昭和43年（1968）	毎日新聞社
図書	『美しい日本の私－その序説』	川端康成	昭和44年（1969）	神奈川近代文学館
複製資料	「美しい日本の私」講演	川端康成		日本近代文学館
複製資料	〝Japan, the beautiful, and Myself〟	サイデンステッカー訳		日本近代文学館
立体物	ノーベル文学賞メダル、賞状			川端康成記念会
写真	自宅で	林忠彦	昭和26年（1951）	林義勝

□企画展示室平面図



2022年春に新発見された資料を展示

（5）開館10周年記念企画展・G7教育大臣会合開催記念「百人一首―和歌と美の世界　展」

綿引　香織

正月のかるた遊びや古典の授業などを通じて、『百人一首』に親しんだ経験を持つという方は、世代を問わず多いことだろう。また、近年の競技かるたや、それを題材にした漫画や映画の人気を反映して、そこから百人一首そのものに関心を持ったという方もいるかもしれない。

そもそも『百人一首』とは、飛鳥時代の天智天皇から鎌倉時代初期の順徳院に至る百人の歌人の歌を、『古今和歌集』以下の勅撰集の中から一首ずつ選んだものである。歌人はほぼ時代順に並べられており、平安、鎌倉初期にいたるまでの和歌、文学、歴史の流れを概観できるという利便性の高さから、歌道の入門書として活用された歴史もある。江戸時代には身につけるべき教養の一つとされ、書道や美術、娯楽などとも結びついて発展した。近代以降は競技かるたが考案され、新しい活用の形も生まれた。

現代人にとって最も身近な古典文学の一つであり、日本文化のなかに深く根付いている作品ではあるが、その成立や歌人・和歌の選択基準など、今なお謎に包まれている部分も多い。

誕生してから今日に至る長い歴史のなかで、『百人一首』はさまざまな変遷をとげてきた。本展では、『百人一首』の成立、興隆、広がりについて、三章に分けて紹介し、あわせて、『百人一首』の和歌の世界を鑑賞するコーナーを設けた。展示構成に沿って概要を述べる。

第一章「百人一首の成立　―藤原定家と百人一首」では、『百人一首』の成立をめぐる状況がどのように考えられてきたのかについて紹介した。『百人一首』の原形は、鎌倉時代前期に、歌人の藤原定家（一一一六二～一二四一）によって作られたと見られている。それは、定家の日記『明月記』の文暦二年（一二三五）五月二十七日条に、「蓮生の依頼により、天智天皇から家隆・雅経卿に至る人たちの和歌を書いた色紙を贈った」と書かれていることと、定家編纂の『百人秀歌』という作品が『百人一首』と一致する部分が大きいことにある。しかしこれらと現在伝わる『百人一首』との間には違いもいくつかあり、今の形になるまでの経緯については不明な点が多い。その後『百人一首』は、室町時代から江戸時代にかけて二条流歌学の入門書として活用され、茶道の世界では「小倉色紙」がもてはやされた。

ここでは、定家の歌集や歌論書、秀歌撰のほか、『明月記』書写本（パネル）、宗祇による百人一首注釈書の版本（富山市立図書館蔵）、鎌倉後期頃書写の『百人秀歌』（重要文化財、冷泉家時雨亭文庫蔵）、『百人秀歌』と『百人一首』の中間的な特徴を持つ異本『百人一首』（個人蔵）、二条流歌学で重視された『三部抄』所収の『百人一首』（個人蔵）、小倉色紙を絵入で紹介した『集古十種』（富山市立図書館蔵）などを展示した。参考資料として、『百人一首』に先行する秀歌撰である『佐竹本三十六歌仙絵巻（複製）』や『時代不同歌合（模本）』、藤原定家による秀歌撰『二四代集（定家八代抄）』（いずれも個人蔵）なども紹介した。

第二章「百人一首の興隆　―歌仙絵と書、かるたの美」では、江戸時代の『百人一首』がさまざまな分野と結びつき、豊かな発展を遂げていったことを紹介した。歌人の肖像画（歌仙絵）という視覚的要素が加わったことで、画帖や絵入版本などのビジュアルな鑑賞の形が生まれ、さらに遊戯具である「かるた」と融合したことで、一層身近な存在となった。主に公家や大名家、富裕な町民層向けに肉筆の豪華なかるたが制作され、かるた需要が高まると、木版刷のかるたが作られて広く普及した。また能筆の書は、鑑賞用だけでなく書道の手本としても活用され、手書きの写本やその書体をもとにした版本が作られた。江戸中期以降、出版文化発達の影響も大きく、木版刷のテキストや注釈書が多数刊行され、豪華な大型本、色鮮やかな多色摺の版本も作られた。『百人一首』は女子教育と結びつき、享受者層は男性から女性へと変化している。こうして『百人一首』は幅広い階層や年齢層に浸透していった。

ここでは、持明院基時筆「色紙形百人一首歌かるた」、「伝道勝法親王筆百人一首歌かるた」や「蒔絵百人一首歌かるた」（いずれも滴翠美術館蔵）などさまざまな意匠を凝らした豪華なかるた、本阿弥光悦や松花堂昭乗ら能筆

の書風による『百人一首』（個人蔵）、清原雪信画「百人一首画帖」（嵯峨嵐山文華館蔵）、百人一首初の絵入版本である素庵本百人一首（後刷、個人蔵）菱川師宣や勝川春章の歌仙絵を用いた絵入版本（個人蔵）など、百人一首の隆盛を示す資料を厳選して展示した。

第三章「百人一首の広がり　―浮世絵と異種百人一首」では、江戸中期以降、『百人一首』を素材とした新たな創作が生み出されていったことを紹介した。『百人一首』を絵画に取り込み、新たな趣向・解釈を加えたのが浮世絵の世界で、大判一枚物の錦絵としては、江戸後期に作られた五種類が確認されている。このほか絵双六なども作られた。一方、『百人一首』という枠組みを利用して新たな歌人や和歌を選んだのが「異種百人一首」と呼ばれるもので、室町時代に始まり、大正、昭和まで作られ続けた。狂歌、川柳、落語などと結びついて生まれたさまざまなパロディも含めて、これらは『百人一首』が教養としていかに社会に浸透していたかのあらわれでもある。異なるジャンルと巧みに融合することで、『百人一首』の世界は拡張を続け、日本文化に深く根を下ろしていった。

ここでは、二代豊国画「全盛百人首」、葛飾北斎画「百人一首乳母が絵とき」、歌川国芳画「百人一首之内」、歌川国芳・広重・三代豊国画「小倉擬（なぞらえ）百人一首」、三代豊国画「百人一首絵抄」という五種の浮世絵、『武家百人一首』、『女百人一首』などの異種百人一首、「むべ山かるた」、「百人一首廻利壽語呂久」、「御簾隠れかるた」（いずれも個人蔵）などを展示した。

「百人一首　―その心を味わう」のコーナーでは、『百人一首』のなかから十八首をとりあげて解説し、作品のイメージを伝える写真や光琳かるた（複製）の画像を添えて歌の心をひもといた。パネルのほか、朗読音声付きの映像も制作し、和歌の世界をゆったりと鑑賞していただくためのコーナーとした。

回廊には、導入として「和歌（やまとうた）の型と美～冷泉家時雨亭文庫～」（ＤＮＰ大日本印刷、ＭＢＳ製作）の映像上映コーナーと、「わたしが選ぶ百人一首」のコーナーを設け、好きな歌二首を選んで投票していただいた。多くの方にご参加いただいた投票企画については、人気ランキングを毎週ＳＮＳで発信し、最終結果はホームページで公表した。ちなみに第一位は紀友則の歌「ひさかたの」（歌番号三三。一二五票獲得）、第二位は在原業平の歌「ちはやぶる」（歌番号一七。一二四票獲得）、第三位は小野小町の歌「花の色は」（歌番号九。一二一票獲得）という結果となった。

本展では、時代を超えて読み継がれる『百人一首』の魅力と文化的な広がりについて、美術館、図書館、個人所蔵の貴重な資料を通じて紹介した。なかでも、『百人一首』の成立を考えるうえで欠くことのできない『百人秀歌』の最古本（重要文化財）を公開できたことの意義は大きい。

今日では、『百人一首』といえば「かるた」のイメージが根強いが、他ジャンルと融合しつつさまざまに姿を変えて発展してきた歴史があり、その背後には豊かな日本文化の土壌が広がっている。『百人一首』の歴史を視覚的に学び、美しく繊細な作品を間近に鑑賞できる楽しさを提供できたのではないかと思う。

アンケートなどから、『百人一首』が世代や性別を問わず関心の高いテーマであることがうかがえた。どの世代にも共通して、家庭や学校での『百人一首』体験があり、競技かるたは現在も人気が高く、漫画・アニメ・映画でも取り扱われている。親子で展示を鑑賞し、思い出を語りあう光景が見られたのが印象に残り、『百人一首』の普遍的で色あせない魅力を実感する機会となった。参加型の投票コーナーが好評だったのは、こうした理由に加えて、自分で選ぶという主体的な楽しさがあったからだろう。

展示では、『百人一首』の和歌の世界のおもしろさを伝えることも目指した。ここには、四季の変化を敏感にとらえ、古歌や物語の世界に遊び、機知に富んだ言葉のやりとりを楽しむ、王朝人たちの洗練された美意識が息づいている。『百人一首』を通じて、時代を越えて私たちの心に響いてくる古典和歌の世界の奥深さに、改めてふれる機会となったのなら幸いである。

関連イベントでは、『百人一首』研究の第一人者である吉海直人氏の記念講演、『百人一首』の斬新な現代語訳で注目を集める詩人の小池昌代氏の講演、中﨑圭子氏（講師、読手）、高岡高校競技かるた部の協力による競技かるた体験や、富山商業高校茶道部の協力によるお茶会体験など、多彩なイベントを開催した。なかでも、高校生の指導による競技かるた体験は非常に好評で、幅広い世代の参加者たちの楽しそうな様子が印象に残った。

最後に、本展の開催にあたって多大なご協力をいただいた吉海直人氏、公益財団法人冷泉家時雨亭文庫をはじめ、貴重な資料をお貸しいただいた嵯峨嵐山文華館、滴翠美術館、富山市立図書館、このほかお世話になったご関係の皆様に深く感謝申しあげます。

□主な展示物

種別	資料・作品名（出版者）	作者	年代	所蔵	展示期間
写真（絵画）	藤原定家図	伝藤原信実画	原品：鎌倉後期	冷泉家時雨亭文庫	全期間
書籍（冊子）	拾遺愚草	藤原定家	江戸中期刊	富山市立図書館（山田孝雄文庫）	全期間
書籍（冊子）	詠歌之大概	藤原定家	江戸中期写	富山市立図書館（山田孝雄文庫）	全期間
書籍（冊子）	近代秀歌（和歌読方口傳書六ヶ條のうち）	藤原定家ほか	江戸中期写	富山市立図書館（山田孝雄文庫）	全期間
写真（書画）	小倉山荘藤原定家詠歌之図	—	原品：江戸時代	嵯峨嵐山文華館	全期間
写真（書籍）	明月記	藤原定家	原品：享保15～20年（1730～35）写	国立公文書館	全期間
書籍（冊子）	小倉山庄色紙和歌抄（百人一首抄）	宗祇	江戸後期刊	富山市立図書館（山田孝雄文庫）	全期間
書籍（冊子）	集古十種　小倉色紙（郁文舎）	松平定信編	明治38年（1905）刊	富山市立図書館（翁久允文庫）	全期間
書籍（冊子）	重要文化財　百人秀歌	藤原定家	鎌倉後期～室町前期写	冷泉家時雨亭文庫	4／26～5／8 ※他の期間はパネル展示
書籍（巻子）	【異本百人一首】	伝小堀遠州筆	江戸時代初期写	個人	全期間
書籍（冊子）	三部抄	—	江戸時代写	個人	全期間
書籍（冊子）	古今和歌集（須原屋茂兵衛）	—	江戸時代刊	富山市立図書館（山田孝雄文庫）	全期間
書籍（冊子）	新古今和歌集（為相本）　復刻版（ほるぷ出版）	日本古典文学会編	—	高志の国文学館	全期間
書籍（冊子）	二四代集（定家八代抄）（出雲寺文次郎ほか）	藤原定家撰	安永4年（1775）9月刊	個人	全期間

種別	資料・作品名（出版者）	作者	年代	所蔵	展示期間
写真（かるた）	光琳かるた　復刻版（ほるぷ出版）	尾形光琳	原品：宝永年間（1704～11）頃	大石天狗堂	全期間
かるた	百人一首かるた	—	江戸時代中期写	個人	全期間
工芸品	貝覆（3種）	—	江戸時代	個人	全期間
書籍（冊子）	倭詞接木花（吉村吉左衛門ほか）	下河辺拾水画	明和6年（1769）刊か	個人	全期間
書籍（冊子）	百人一首像讃抄（鱗形屋）	細川幽斎著、中院通勝補、菱川師宣画	天和3年（1683）刊	個人	全期間
絵画（掛軸）	【清少納言】	稲垣晴雪画	近代	個人	全期間
絵画（掛軸）	【紫式部】	伝狩野探雪（孟隣齋探雪）作	江戸時代	個人	全期間
書画（巻子）	佐竹本三十六歌仙絵巻　複製	—	明治34年（1901）	個人	前期
書画（画帖）	三十六人歌合	—	江戸時代	高志の国文学館	後期
書画（画帖）	三十六歌仙画帖	—	江戸時代	個人	全期間
書画（色紙）	三十六歌仙絵　※6点	居初つな書・画	江戸時代前期～中期	個人	全期間
書画（巻子）	時代不同歌合　模本（前欠）	後鳥羽院編	江戸時代写	個人	全期間
書画（画帖）	百人一首画帖	清原雪信画	江戸時代前期	嵯峨嵐山文華館	全期間
書画（色紙）	百人一首歌仙絵　※4点	—	江戸時代	個人	全期間
かるた	色紙形百人一首歌かるた	持明院基時筆	江戸時代前期（延宝頃）	滴翠美術館	全期間

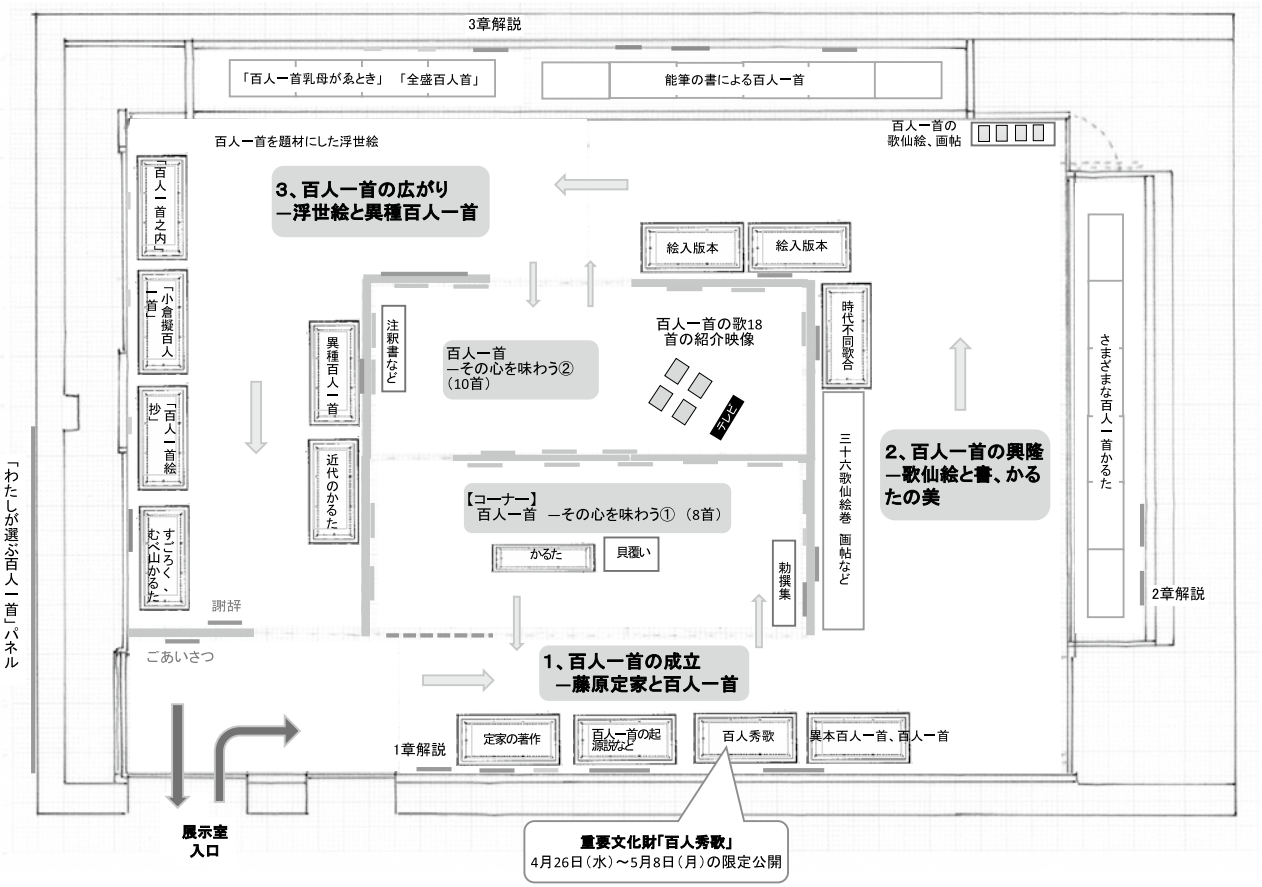
種別	資料・作品名（出版者）	作者	年代	所蔵	展示期間
かるた	百人一首歌かるた	伝道勝法親王筆	江戸時代前期	滴翠美術館	全期間
かるた	櫛形三十六歌仙絵入り歌かるた	—	江戸時代	滴翠美術館	全期間
かるた	蒔絵百人一首歌かるた	—	江戸時代前期	滴翠美術館	全期間
かるた	板地百人一首歌かるた	法眼守俊筆	江戸時代後期	滴翠美術館	全期間
かるた	百人一首かるた	—	江戸時代前期	嵯峨嵐山文華館	全期間
かるた	百人一首かるた（版彩色）	—	江戸時代	個人	全期間
書画（巻子）	蓮下絵百人一首和歌巻　複製	本阿弥光悦書、俵屋宗達下絵	原本：江戸時代（17世紀）	個人	全期間
書籍（折本）	小倉山百人一首	伝近衛信尹筆	江戸時代	個人	全期間
書籍（巻子）	百人一首	伝松花堂昭乗筆	江戸時代	個人	全期間
書籍（冊子）	百人一首　八幡山式部卿真跡	—	承応2年（1653）刊	個人	全期間
書籍（冊子）	尊円百人一首（梅村三郎兵衛）	—	江戸時代刊	個人	全期間
書籍（冊子）	小倉山百人一首（素庵本）	—	後刷	個人	全期間
書籍（冊子）	小倉百人一首	菱川師宣画	後刷	個人	全期間
書籍（冊子）	錦百人一首あづま織	勝川春章画、猨山周之書	安永4年（1775）刊	個人	全期間
書籍（冊子）	百人一首（福井源次郎）	土佐光貞画、石井行宣書	明治時代刊	個人	全期間
書籍（冊子）	定家撰錦葉抄（米田清右衛門）	石田玉山画	文化10年（1813）刊	個人	全期間
錦絵（かるた）	錦絵　百人一首かるた	—	江戸時代後期	個人	全期間
錦絵	全盛百人首　小野小町　扇屋内花染（栄久堂山本屋平吉）	二代歌川豊国画	文政13年（1830）頃刊	個人	全期間
錦絵	全盛百人首　山辺赤人　玉弥内白玉（栄久堂山本屋平吉）	二代歌川豊国画	文政13年（1830）頃刊	個人	全期間
錦絵	全盛百人首　猿丸太夫　大黒屋内雛之助（栄久堂山本屋平吉）	二代歌川豊国画	文政13年（1830）頃刊	個人	全期間
錦絵	百人一首乳母がゑとき　持統天皇（栄寿堂西村屋与八）	葛飾北斎画	後刷	個人	全期間
錦絵	百人一首乳母がゑとき　小野の小町（栄寿堂西村屋与八）	葛飾北斎画	後刷	個人	全期間

種別	資料・作品名（出版者）	作者	年代	所蔵	展示期間
錦絵	百人一首乳母がゑとき　源宗于朝臣（栄寿堂西村屋与八）	葛飾北斎画	後刷	個人	全期間
錦絵	百人一首乳母がゑとき　清原深養父（栄寿堂西村屋与八）	葛飾北斎画	後刷	個人	全期間
錦絵	百人一首乳母がゑとき　在原業平（栄寿堂西村屋与八）	葛飾北斎画	後刷	個人	全期間
錦絵	百人一首之内　在原業平朝臣（恵比須屋庄七）	歌川国芳画	天保13～14年（1842～43）頃刊	個人	前期
錦絵	百人一首之内　権中納言定家（恵比須屋庄七）	歌川国芳画	天保13～14年（1842～43）頃刊	個人	全期間
錦絵	百人一首之内　僧正遍昭（恵比須屋庄七）	歌川国芳画	天保13～14年（1842～43）頃刊	個人	前期
錦絵	百人一首之内　素性法師（恵比須屋庄七）	歌川国芳画	天保13～14年（1842～43）頃刊	個人	前期
錦絵	百人一首之内　菅家（恵比須屋庄七）	歌川国芳画	天保13～14年（1842～43）頃刊	個人	後期
錦絵	百人一首之内　源兼昌（恵比須屋庄七）	歌川国芳画	天保13～14年（1842～43）頃刊	個人	後期
錦絵	百人一首之内　周防内侍（恵比須屋庄七）	歌川国芳画	天保13～14年（1842～43）頃刊	個人	後期
錦絵	小倉擬百人一首　伊勢大輔　九重太夫・矢田平（伊場屋仙三郎）	歌川国芳画	弘化2～嘉永元年（1845～48）刊	個人	全期間
錦絵	小倉擬百人一首　清少納言　菅丞相・判官代輝国（伊場屋仙三郎）	三代歌川豊国画	弘化2～嘉永元年（1845～48）刊	個人	前期
錦絵	小倉擬百人一首　素性法師　信夫惣太・梅若丸（伊場屋仙三郎）	歌川広重画	弘化2～嘉永元年（1845～48）刊	個人	前期
錦絵	小倉擬百人一首　小野小町　園部左衛門（伊場屋仙三郎）	歌川広重画	弘化2～嘉永元年（1845～48）刊	個人	後期
錦絵	小倉擬百人一首　西行法師　静御前・弁慶（伊場屋仙三郎）	三代歌川豊国画	弘化2～嘉永元年（1845～48）刊	個人	後期
錦絵	百人一首絵抄　廿一　素性法師（佐野屋喜兵衛）	三代歌川豊国画	江戸時代末期刊	個人	全期間
錦絵	百人一首絵抄　五十一番　藤原実方朝臣（佐野屋喜兵衛）	三代歌川豊国画	江戸時代末期刊	個人	全期間

種別	資料・作品名（出版者）	作者	年代	所蔵	展示期間
錦絵	百人一首絵抄　五十五番 大納言公任（佐野屋喜兵衛）	三代歌川豊国画	江戸時代末期刊	個人	全期間
錦絵（絵双六）	百人一首廻利壽語呂久 （大錦堂　大和屋貞助板）	綾岡輝松画	江戸時代末期～明治時代頃刊	個人	全期間
錦絵（絵双六）	新板栄壽百人一首雙六 （有田屋清右衛門）	歌川芳虎画	江戸時代末期～明治時代頃刊	個人	全期間
錦絵（かるた）	むべ山かるた	—	江戸時代後期刊	個人	全期間
書籍（冊子）	新百人一首（林和泉掾）	足利義尚編	明暦3年（1657）刊	個人	全期間
書籍（冊子）	武家百人一首（渋川清右衛門）	榊原忠次編	元禄16年（1703）刊	個人	全期間
書籍（冊子）	後撰百人一首 （播磨屋喜助ほか）	—	文化4年（1807）刊	個人	全期間
書籍（冊子）	女百人一首（岡田屋嘉七ほか）	—	嘉永4年（1851）刊	個人	全期間
錦絵（かるた）	皇国百人一首かるた （東京丸屋板）	—	明治時代刊	個人	全期間
かるた	御簾隠れかるた	—	昭和17年（1942）	個人	全期間
映像	和歌の型と美～冷泉家時雨亭文庫～	DNP大日本印刷、MBS		冷泉家時雨亭文庫	全期間
映像	百人一首―その心を味わう	高志の国文学館	新規製作	高志の国文学館	全期間

「前期」は3／19～4／24、「後期」は4／26～6／5をさす。

□企画展示室平面図



Ⅱ

〔論文〕

愛惜（あいじゃく）と絶望 ―八世紀日本における詩の成熟―

中西　進

愛惜（あいじゃく）と絶望　―八世紀日本における詩の成熟―

中西　進

（一）郷歌と『万葉集』

八世紀日本において、ほぼ全容を整えたと思われる詩集『万葉集』は、四五〇〇首を超える詩を集めた世界的な文化遺産といえるが、もちろん同様な文化遺産は、より中国に近い韓国にもあったにちがいない。その一部に、韓国が今に伝える古代歌謡郷歌（ヒャンガ）がある。

「郷歌」とは郷里の歌、つまり身近な歌という意味だから、韓国から見て、中国の詩（日本で漢詩とよんで自国の詩と区別するもの）に対する自国の歌を指す言葉であろう。まさに日本の「和歌」とひとしいものが「郷歌」だから、郷歌の存在意義は大きい。

わたしは仲間たちと郷歌を読み、その研究の一端を書物にしたことがある。中西進・辰巳正明編『郷歌　注釈と研究』（新典社二〇〇八）がそれだ。

そこで郷歌と日本古代の歌謡との関係を、以下に少しく述べておこう。有名な郷歌に『三国遺事』（巻二）の処容歌がある。新羅四九代の王憲康の時代（八七五―八八六）、王は、竜の子の一人、処容を臣下に加え、妻を与えた。ところがある夜、人間に姿をかえた疫病神が妻の寝床へ入っていた。そこに帰ってきた処容の誦んだのが処容歌である。

滑稽なことに、
東の都の明るい月に　夜通し遊び回り
帰ると寝床に　脚が四つあった
二つは己のものだったが
二つは誰のもの？
とられてしまったものを
どのようにしてもどそうか

（林英樹訳）

と歌い、処容は男を責めなかった。そこでこの寛大な処容に感謝した疫病神は、「今後あなたの顔を描いた門には入らない」といったという。

この話を聞いた現代人は、すぐに蘇民将来のことを連想するだろう。今でも日本人は、家の門に「蘇民将来」とかいた貼紙を見ることがある。主人公の名を変えつつ今に伝わる伝説が、この郷歌の物語であった。

そしてこちら蘇民将来の方は、『釈日本紀』（巻七）に、『備後国風土記に曰く』として載せられている。

たしかに、韓国と日本の間で、物語・風習の授受があったであろう。

またこの『風土記』の説話は「茅の輪を身につけよ、しからば疫病からもまぬがれるだろう」とも言っている。今日「茅の輪くぐり」が流行する所以である。

そしてまた処容物語は、『万葉集』（巻一一・二三五三）にもその片鱗を見せる。

長谷（はつせ）の斎槻（ゆつき）が下に
わが隠せる妻
茜（あかね）さし照れる月夜に
人見てむかも

（長谷のユツキ山のふもとに隠したわが妻を、月がアカネ色に輝く夜は、よその男が犯してしまうだろうか）

先ほどあげた処容歌を思い出してほしい。その冒頭の「東の都の明るい月」を。ともに皎こうとした月夜における異変を言い出しており、ふしぎな月明の中に、変事が起こることを示している。

さらにこの一首には別に伝誦してきた歌詞が書き添えられていて、それは末句を「人見つらむか」とする。つまりこの歌は、創作した歌を一回だけ歌った、というのではなく、大勢の人が何回も歌い継いだものであることの証拠を残している。作者を大勢の無名の集団者とすべき一首である。

だから最初に歌い出したのも新羅の民衆だっただろうし、その人たちが日

本に移住したり、同一集団が二つの土地に分かれて住んだりする以前から、すでに伝えられていた歌謡であろう。

わたしはこれについて、国境に左右されない文化圏といった概念が必要だろうと考える。同一文化圏の中の、同時代的概念の中での出来事だと、考えたいのである。

ところで『万葉集』の中には、七三〇年代に高橋虫麻呂が、嬥歌（集団婚）で有名な筑波山で歌った長歌に、

人妻に　吾も交らむ
わが妻に　他も言問へ
（他人の妻とわたしも交わろう。わたしの妻に、他人も求愛せよ）

という一節がある。今日は、神が結婚を許す日だから、誰とでも交われというのである。

こうなると、もうこの結婚は神に捧げる行事だとさえいうことになる。むしろ人間の幸への祈りとして、結婚は勧誘されるべきものだったのである。

しかし一方、先の長谷地方の男はいかにも心細いらしい。すでに政府は戸籍の編成を進めつつあり、人間が個人化を勧められている時代だから、「神の業」なるものがどれほど東アジアの中で信頼されていたか、不明である。しかも一方で虫麻呂のように、常に孤独を歌う詩人が神業を持ち出すような時代に、『万葉集』と郷歌がその基本を共有していたことは、大事な文化現象といえるだろう。

虫麻呂は歌に題して、「嬥歌会をした時の歌だ」と、あえて言う。中央朝廷の公の表現が「嬥歌」、彼は「これを俗語では『カガヒ』という」と注をつける。中央官僚の彼は「俗語」の世界に入り込んでいって、人妻への言問いを揚言するのである。

この複合的、過渡的な文化相が、郷歌と『万葉集』を支える基盤として、共有されている実体は、東アジアの文化の担い手の共通性として注目されよう。

（二）呪言からの出発

さらに郷歌が『万葉集』にとって大事な歌謡である理由の一つに、その呪言性がある。

この呪言とは広く、神仏への祈りのことばや、神々が示す未来への予告をさす。二つの歌群はともどもにそれを歌うのである。

その一つとして郷歌の例をあげると、早ばやと二番目に「彗星歌」を見ることができる。『三国遺事』（巻五）の真平王の時代（五七九―六三二）だから、万葉時代よりやや早い頃の作品である。

歌謡によると彗星が心大星を犯したので大騒ぎになった。ところが融天師が郷歌を作って「彗星ではない。帚星だ」といった。そこで騒ぎが収まった、という歌だ。

一見単純な叙事の詩のように見えるが、彗星を帚星と明言するところに、呪言性が考えられる。融天師という物語上の主人公も、文字通り天を融通する占師らしく思われるし、その言辞こそ、未来の予測や本質の喝破となる呪言なのであろう。

みごとな呪言も郷歌の一つの特性と考えられるが、一方『万葉集』も幕開けは、呪言から始まるとわたしには思われる。

その幕開きを飾る額田王の歌は呪祷にみち、また興味ある謎解きから始まる。次の有名な一首は、その代表的な呪言であろう。

熟田津に船乗りせむと
月待てば
潮もかなひぬ
今は漕ぎ出でな
（熟田津から船団を出発させようと、機会を占うと、潮ぐあいもよい。さあ出航だ。）

という、ト占を委ねられた時の結果報告がこの一首である。わたしはこれを

「バ発想」として一括できる歌型だと思っている。現在の事象から、未来を予告する物を見てとる。そこに占の結果が現れ、よって未来を断言するスタイルである。

やがてこの発想は風景のよみとり方にもなり、「風景の発見」という文芸へと導かれてゆく。たとえば山部赤人における風景の発見も、この発想をひきつぐものであった。

事態にせよ心象にせよ、判断すべき条件は習慣として整うだろう。するとこの仮想の「バ」は、原因と結果を疑いなく続けていくから、前提条件となって呪術性を失う。単純な説明の文体となるのである。

（三）人間であることの苦悩

さて、このように『万葉集』は郷歌と共通の領域から出発したが、その後さらに広くアジア大陸の文学から多大な影響を受けつつ、詩的発展を遂げていった。とくに最末期に登場する大伴家持（七一六―七八五）には一つの詩の完成が見られる。

その中で独自な自然現象として注目すべき、相対的な詩性の姿がある。同時代人であり親交を結んだ二人、大伴旅人（おおともの たびと）（六六五―七三一）と山上憶良（やまの うえの おくら）（六六〇―七三〇）は、この時代における世界的な詩人といってよいだろう。しかも二人は、親友でありながら作風がはっきりと異なり、ともどもにこの時代の詩のリーダーである点に、文学的な価値を持つ。

ここでは二人を対立的に取り上げて、古代日本の詩のあり方を、述べてみたい。

まず、大伴旅人には、代表作の一つに、次のような詩がある。

世の中は　空しきものと
知る時し
いよよますます
悲しかりけり

（世間が「空」だと知った時、わたしは激しい悲嘆に陥った）

仏教から「世間」を詩の世界に導入し、それが虚仮（こけ）であることを悲嘆するのである。インド発の世間虚仮の思想は、ここでは肉体的な悲嘆となって、一つの詩の次元（ディメンション）を構築する。その契機は、妻の死である。

妻の死という現実の身体的情報は、作者の祈りを切断して、「悲嘆の詩」を作った。

そもそも日本語の「かなし」とは、どんな内容をもつのか。この語源は目下二つの解釈を許し、いずれとも決しがたいが、一つには日本語の「かぬ」という動詞から発生した形容詞かという解釈である。

「かぬ」とは「兼ぬ」。いくつかの物に跨がる感情で一つのことばでは言い表しようがない感情を意味するとも思える。驚き、悲痛、衝動、悲嘆さまざまな苦しみを味わう心境だろうが、そうした動作を味わった後の心の状態を表す形容詞としては、愛の感情に近いいとおしさとなり、むしろ愛すべき対象を意味するようになる。

するとこの場合は、仏教で捉えた空無の世の中について、半ば逆説的に愛情をもつ気持ちを味わっていると、考えてよい。

それがもう一つの解釈、中国語の「感」を形容詞化したと考える場合と、さほど矛盾しなくなる。ひたすら身体全体が感傷に蔽われてしまって、茫然と生きている状態、しかし愛着して手放しがたい、切なさを作者は深めたことになる。

「空し」とは空無のこと、それを教義として知りながら、旅人は世の中にますます愛着をもったのである。読者はこの無秩序な肉体性を、妻の死から与えられた物として、受け取らざるを得ない。

そしてそれは、この作者の生身を丸ごと容認せよと、読者に迫ってくる。人間が弱き葦（あし）であることを、読者はみな、知っているのに。

一方同時代走者（ランナー）の山上憶良には、素材が近い、次のような詩がある。

世の中を
憂（う）しと恥（やさ）しと　思へども
飛び出しかねつ

鳥にしあらば
（世間が辛（つら）い。と思うと世間に対して恥ずかしいが、鳥のようには世間から飛び上がれない）

彼は世間から自律的な自己規制を探り出し、その倫理的欠落に、深く絶望する。彼の観点は多分に儒教的であり、その照準の中から欠落する自己を発見したからである。

おもしろいことに、こう比較させてみると旅人は「空し」「悲し」といい、憶良は「憂し」「恥し」といい、ともに生きる世の中を異なった形容詞で捉えようとしている。

憶良はまず「憂し」という。心が塞ぎ込んで、重く気持ちを閉ざしがちになるものとして世間を捉えるのである。

釈迦が人間の苦患に気づいて仏道を求めたという順序でいえば、これは文字通り現世苦を体験しているさまを示しているが、さてその釈迦自身も、死の直前には折しも雨期でなかったこともあって、「晴朗」な自然に感嘆の声を発している。何も仏教の専売品が「憂し」ではないのだが、やはり、「負を極めて正を求める」仏教タイプからいえば、これは仏教的世界観の正直な反映といってよいだろう。

多分に理知に束縛される悲哀に、この作者は縛られている。

その原因に、彼の生涯が関係しないといえば、うそであろう。わたしがこの作者を百済人でないかと言い出してからもう四十年にもなるが、この考えを改める必要に出会ったことはない。

郷歌は新羅の歌が今日伝えられており、一方憶良は百済人かと思われるから、立場は別だが、ともどもに仏教の浸透は大きい。

特に憶良には、あの難渋な沈痾自哀文という長文の漢文作品がある。韓半島には国境を越えて、教養としての仏教思想の重みが大きい。

そしてその上に、憶良は世の中を「恥（やさ）しい」という。「やさしい」とは「痩（や）す」という動詞に発する形容詞で、相手に対して痩せる思いをすることを表す。身の拙さを感じて、恥ずかしく、身の細る思いをするというのが、この語の本義である。

ではなぜ恥ずかしいのか。人間として世の人として、名をなし栄達を遂げることがりっぱで、そうでないことが恥ずかしいという理屈が、彼の他の作品から伺える。

これは大貴族だった旅人の知りえない人倫上の課題であろう。

さてその上で憶良は世間から離脱することを求めるのだが、鳥のように飛び立つことはできない。

旅人は苦悩の結果、世間への愛着を深めて悲しみに沈んだ。反対に憶良は世間を拒否しつつ、自己を更新することは出来なかった。

これらが相対立しつつ、ともどもに人間の実在であることによって、わたしたちは深く生を見つめ直すこととなる。

ともに期待すべき自己の喪失を、一人は愛惜し、一人は絶望した。

このように人間はだれしも自己の幸福を祈り続けながら、大半の祈りは打ち砕かれ、あるいは悲嘆の、あるいは絶望の破片となって心に抱かれる。そして詩が生まれる。旅人と憶良のあり方はその典型であろう。

しかしこの根源的な人間の祈りの挫折は、間違いなく全世界の各地に深淵を作って、人間の無際限な心の渇きを癒やす、謎深い水を湛えているのである。

（了）

令和４年度 高志の国文学館 紀要 第８号

令和５年９月30日発行

編　集　高志の国文学館
富山県富山市舟橋南町２－22
ＴＥＬ０７６－４３１－５４９２

印　刷　北日本印刷株式会社

発　行　高志の国文学館

※許可なく転載、複製することを禁じます。